



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	2018年度北海道礼文町浜中2遺跡発掘概要報告書
Author(s)	平澤, 悠; 加藤, 博文
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/76489
Type	report
File Information	2018Hamanaka.pdf



2018 年度 北海道礼文町 浜中 2 遺跡 発掘概要報告書



Designed by YUKI koji

北海道大学アイヌ・先住民研究センター
Center for Ainu and Indigenous Studies,
Hokkaido University

例 言

1. 本概報は、2018 年 8 月 4 日から 8 月 25 日にかけて北海道礼文郡礼文町の浜中 2 遺跡において行った考古学調査の概要報告である。

2. 本発掘調査は、北海道大学が組織主体となり、以下の体制で実施した。調査組織は以下のとおりである。

発掘主体者 常本照樹（北海道大学アイヌ・先住民研究センター センター長）
発掘担当者 加藤博文（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 教授）
調査員 平澤 悠（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 博士研究員）
調査協力者 近藤祉秋（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 助教）
調査協力者 佐藤丈寛（金沢大学医薬保健研究域医学系 助教）
調査協力者 岡田真弓（北海道大学創成研究機構 特任助教）
調査協力者 薦谷 匠（国立研究開発法人海洋研究開発機構 博士研究員）

遺 跡 名 浜中 2 遺跡（北海道教育委員会登録番号：H-08-019）
所 在 地 北海道礼文郡礼文町大字船泊村字ホロナイホ 499-2, 499-4, 499-5
発掘面積 31 m²

3. 2018 年度の調査実施にあたっては、科学研究費補助金基盤研究 A「境界域での民族集団の形成：考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」（研究代表者：加藤博文、2016-2019 年度）、および日本学術振興会研究拠点形成事業（先端拠点形成型）「文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築」（プロジェクトコーディネータ：加藤博文、2018-2022 年度）の助成を受けた。

4. 本概報の作成は、本研究プロジェクトに参加したメンバーが分担しておこなった。出土遺物のうち、土器片の拓本・断面実測およびトレースは、佐藤理恵、武田美香、劉秉玖（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 事務補助員）が実施した。石器、骨角器類、金属器の実測およびトレースは加藤・平澤が実施した。本概報の執筆は、以下のように分担している。

例 言、第 1 章、第 2 章、第 7 章 加藤博文
第 3 章、第 4 章、第 5 章第 3 節・第 4 節・第 5 節 平澤悠
第 5 章第 2 節 1) 劉秉玖、第 5 章第 2 節 2) 坂口隆（アイヌ・先住民研究センター 客員研究員）
第 6 章 久保大輔（北海道大学大学院 医学研究院連携医学系部門 人類進化学教室 准教授）

なお本年度の出土遺物のうち、動物遺存体は慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室において佐藤孝雄教授を中心に整理作業をおこなっている。また出土動物遺存体のうちカラフトブタとイヌについては、北海道大学大学院理学研究院多様性生物学分野の増田隆一教授を中心に DNA 分析を進めている。年代測定および人骨の安定同位体分析については、東京大学総合研究博物館の米田穰教授を中心に分析作業をおこなっている。

5. 2018 年度の出土資料は、北海道大学アイヌ・先住民研究センターで保管している。

6. 調査に際しては、調査地点地主である中谷榮氏に調査期間の全体を通じてご理解とご協力を得た。調査までの準備と調査実施においては、小野徹町長、岩城修教育長、藤澤隆史社会教育主事をはじめ礼文町および礼文町教育委員会の支援と協力を得た。調査メンバーを代表して感謝の意を表する次第である。



遺跡と船泊湾（ドローンによる撮影）



発掘調査およびフィールドスクールの参加者

目 次

第1章 調査の目的と実施体制	1
第1節 調査の目的	
第2節 礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連	
第2章 浜中2遺跡の調査と概要	2
第1節 調査にいたる経緯	
第2節 礼文島の環境	
第3節 遺跡の立地	
第4節 調査への参加者	
第3章 調査区について	5
第1節 調査区の設定	
第2節 調査区の層序	
第4章 検出された遺構	10
第1節 アイヌ文化期・擦文文化期の遺構	
第2節 オホーツク文化期の遺構	
第3節 縄文文化期の遺構	
第5章 主な出土遺物	16
第1節 出土遺物の構成	
第2節 土器	
第3節 石器	
第4節 骨角器	
第5節 金属器	
第6章 2017年度出土 NAT004号人骨の形態人類学的所見	26
第1節 骨の保存状態	
第2節 性別と死亡時年齢	
第3節 頭蓋の形態と体格	
第4節 骨考古学的所見	
第7章 まとめ	30
引用・参考文献	31

第1章 調査の目的と実施体制

第1節 調査の目的

浜中2遺跡での考古学調査は、2011年からBHAP(Baikal-Hokkaido Archaeology Project)の一環として、アルバータ大学(カナダ)と北海道大学の共同研究として開始された。アルバータ大学との共同調査は、2016年度をもってカナダ側の研究助成期間が終了したため、2017年度以降は、北海道大学が中心となり、日本学術振興会の科学研究費補助金と研究拠点形成事業の支援を受けて実施している。

これまでの調査によって浜中2遺跡は、縄文文化期後半から18世紀のアイヌ文化に至る生活痕跡が4m以上に累積した多層遺跡であることが明らかになっている。2018年度の調査は、調査区の南西端においてI層中で確認されたアイヌ文化期のアワビ貝集積遺構と、調査区中央部のIX層において確認された縄文文化期晩期主体の土器・石器・動物骨が集積する文化層の面的広がりを確認することを目的として計画された。

第2節 礼文島における調査と研究拠点形成事業との関連

礼文島は、先史時代の狩猟採集民社会の文化変化と環境適応行動を比較考察する上で最良のデータが得られるフィールドである。本プロジェクトでは、礼文島北部の遺跡の立地環境に注目し、船泊湾域の遺跡群において、1) 居住地点における生業活動の時期的変遷の把握、2) 砂丘形成過程と生業活動面の形成過程の相関関係の解明、3) 古人骨資料からの集団系統や古食性データに関するサンプルの収集、4) 遺跡周辺における古気候環境データの集成を目指している。

2012年度からは、科学研究費補助金基盤研究A「アイヌ民族文化の形成過程の解明に向けた総合的研究」(研究代表者:加藤博文、2012-2015年度)の助成を受け、2013年度からは日本学術振興会研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「北方圏における人類生態史総合研究拠点」の研究助成を受けることができた。また継続課題として、2016年度からは科学研究費補助金基盤研究A「境界域での民族集団の形成:考古学と人類遺伝学によるアイヌ民族形成過程の解明」(研究代表者:加藤博文、2016-2019年度)、研究拠点形成事業(先端拠点形成型)「文化的多様性の形成過程の解明を目指す国際先住民研究拠点の構築」(2018-2022年度)の助成を受けている。

第2章 浜中2遺跡の調査と概要

第1節 調査にいたる経緯

北海道大学とアルバータ大学による浜中2遺跡における国際共同調査は、2011年度から開始された。調査にいたる経緯は、これまでの概要報告において提示した通りである（加藤ほか2012）。

2012年度の調査は、主に地中探査レーダーによる表層からの貝層や墓、配石遺構の分布状態の確認調査を実施した。2015年度の調査は、それまでのオホーツク文化期と続縄文文化期に加えて、下層で確認された縄文文化期の遺物包含層の調査を目的として、8月1日から8月31日までの期間で調査を実施している（北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編2016）。2017年度には、調査区南側において確認されたアイヌ文化期の文化層の広がりを確認することを目的に、8月1日から8月25日まで調査を実施した。（北海道アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室編2016）またこれまでの調査内容については、幾度か口頭による報告も行なっている（岩波・長沼2015、加藤2015、岩波ほか2016、平澤ほか2017など）。

第2節 礼文島の環境

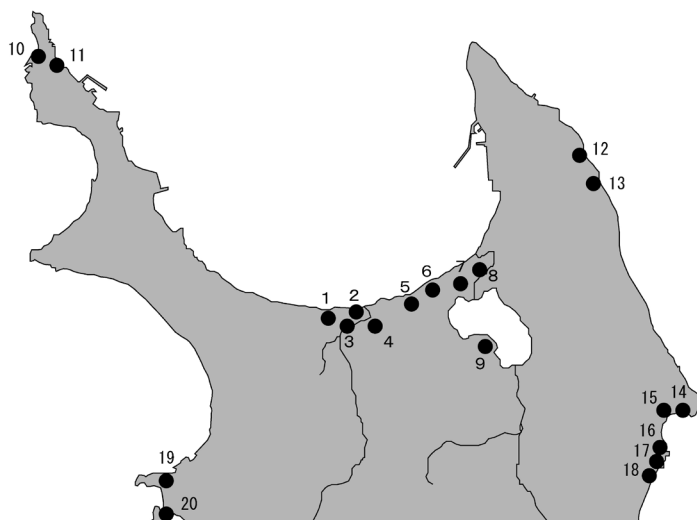
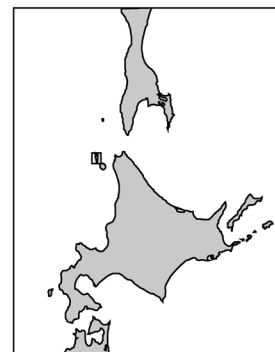
礼文島は、北海道島の北西約60kmに位置する離島である。島は南北に約25.8km、東西に7.9kmと南北に細長い形状を呈している。島の東西の両海岸は、海蝕崖によって急峻な海岸線が続き、島中央部より注ぎ出る河川により開析された谷状地形と河口が入り江状の地形を作り出している。島の北部は、一転して緩やかな起伏が続き、金田岬とスコトン岬に挟まれた船舶湾は、遠浅の大きな内湾地形を作り出しており、湾の中央部には複数の時期により形成された砂丘状地形が広がっている。

島の最高地点は、礼文岳で490mであり、低標高の緩やかな起伏をもった島である。島の動植物は、離島特有の特色を示しており、ヒグマ、エゾシカ、キツネなどの大型中型獣は生息していない。植生としては、針葉樹としてトドマツ、ハイマツ、落葉広葉樹はダケカンバ、オノエヤナギ、草本類ではチシマザサが主体をなす。島の北端に広がる船舶湾は、海岸沿いに広がる砂丘列と東部に位置する久種湖で構成される。湾の東部に位置する久種湖は、周囲6kmほどの淡水湖である。湖の前面には、船舶砂丘が東西ほぼ1kmにわたり続いている。一方、船舶湾中央部には、島中央部より島最大の河川である大沢川が南から北へ向かい注いでいる。この大沢川の河口から湾の西側スコトン岬方向に向かい形成されているのが浜中砂丘である。これら二つの砂丘である船舶砂丘と浜中砂丘は、異なる時期に形成された複数の砂列帯によって構成されている。

第3節 遺跡の立地

船泊湾沿いに広がる砂丘からは、古くから石器や土器、そして人骨が出土することが知られてきた。これまでの調査でもこの一帯に縄文文化期からアイヌ文化期にわたる複数の遺物包含層が確認されている。船泊湾の東側に伸びる船泊砂丘では、縄文文化期後期から、続縄文文化期、オホーツク文化期からアイヌ文化期にわたる遺物包含層が確認されている(第1図)。この船泊砂丘の西端には、重兵衛沢川が船泊湾に注いでいる。砂丘先端には擦文文化期から近世アイヌ文化期にかけての遺物包含層をもつ重兵衛沢遺跡、重兵衛沢2遺跡が位置している。船泊湾の中央部には大沢川の河口があり、河口の西側の浜中砂丘には、浜中1遺跡と浜中2遺跡が位置する。浜中1遺跡は北海道道507号線の北側に位置し、海側に貝層や墓が確認され、数多くの人骨が発掘収集されてきた(児玉・大場 1952)。遺跡の時期はオホーツク文化期から近世アイヌ文化期と推定されている。一方、浜中砂丘の南側の後背丘陵の裾野には、神崎ウエンナイボ遺跡が位置する。現在の神崎小学校のグラウンドや旧教員宿舍周辺から、続縄文文化期の遺物を含む数多くの土器や石器、動物骨が出土している(松野ほか 1970)。

浜中2遺跡の範囲は、現在の浜中集落にほぼ重なる。集落中央の最も高い地点は標高約10mを測る。砂丘の東西端は緩やかな傾斜を示し、砂丘自体の比高差は5m程度である。1990年に排水管の付替え工事に際して実施された事前調査では、続縄文文化期からアイヌ文化期にかけての多層遺跡であることが明らかとなった。その後、1990年代には筑波大学や国立歴史民俗博物館による学術調査が実施され、貝層や地床炉、墓など縄文文化期からアイヌ文化期にかけての生活痕跡が累積することが明らかにされた(国立歴史民俗博物館編 2000、前田・山浦 2002)。また2011~2015年度には千葉大学が、浜中砂丘の最高地点周囲において学術調査を実施している(千葉大学文学部考古学研究室編 2016)。



- | | | | |
|--------------|--------------|----------------|---------------|
| 1 : 浜中2遺跡、 | 2 : 浜中1遺跡、 | 3 : 神崎遺跡、 | 4 : 浜中5遺跡、 |
| 5 : 重兵衛沢1遺跡、 | 6 : 重兵衛沢2遺跡、 | 7 : 船泊遺跡、 | 8 : オションナイ遺跡、 |
| 9 : 沼の沢チャシ、 | 10 : スコトン遺跡、 | 11 : 水難諸霊の塔遺跡、 | 12 : 幌泊第1遺跡、 |
| 13 : 幌泊第2遺跡、 | 14 : 上泊2遺跡 | 15 : 上泊1遺跡、 | 16 : 上泊4遺跡、 |
| 17 : 上泊3遺跡、 | 18 : 東上泊遺跡、 | 19 : 鉄府イナウ遺跡、 | 20 : 西上泊遺跡 |

第1図 礼文島の位置と島北部の遺跡

第4節 調査への参加者

2018年度の調査には、調査員・調査協力者以外に以下の研究者と学生が参加している。

佐藤孝雄（慶應義塾大学文学部 教授）、陳瑪玲（国立台湾大学人類学部 教授）、Christian Leipe（名古屋大学宇宙地球環境研究所 共同研究員）、坂口隆（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 客員研究員）、澤藤りかい（琉球大学大学院医学研究科 博士研究員）、Gabriel Hughes（オックスフォード大学考古学研究所 博士研究員）、Izumi Braddick（オックスフォード大学考古学部 博士課程）、劉崇宇（国立台湾大学大学院 博士課程）、紀科案（総合研究大学院大学 博士課程）、胡忠正（同大学院 博士課程）、小林光（東京大学大学院 博士課程）、山口晴香（同大学院 修士課程）、長谷川陽央（同大学院 修士課程）、劉秉玟（北海道大学アイヌ・先住民研究センター 事務補助員）、Anna Shepova（サハリン国立大学考古学部 修士課程）、Tansy Branscombe（オックスフォード大学考古学部 修士課程）、Andy Rogers（同大学院 修士課程）、佐藤巧庸（慶應義塾大学大学院 修士課程）が参加した。また国際フィールドスクールの受講生は以下の構成である。連合王国（サセックス大学、リヴァプール・ジョン・ムーア大学）2名、アメリカ（イリノイ州立大学）1名、ロシア（極東連邦大学）1名、大韓民国（延世大学校）1名、中国（南開大学）1名、オランダ（ライデン大学）1名、台湾（国立台湾大学）7名、日本（北海道大学）8名の8カ国から計22名。ボランティアは、Wendy Lee（台湾）、木田玲子（アメリカ）、Eleanor Salkeld（文化財調査員、英国）、Clara Asiter（パリ第1大学修士課程、フランス）、鈴木慎太郎（慶應義塾大学 学士課程）が参加した。

発掘調査と並行して行われた文化人類学のフィールドワークおよびスクールは、近藤祉秋（アイヌ・先住民研究センター 助教）、田本はる菜（同センター 博士研究員）が担当した。

同じく調査期間中にピスカ21にて開催した発掘調査成果展示は、岡田真弓（北海道大学創成研究機構 特任助教）、橋本隆行（アイヌ・先住民研究センター 技術補佐員）、平澤悠（同センター 博士研究員）が中心となり製作した。

また国際フィールドスクールのプログラムの一環として、考古学とアートの融合をテーマにワークショップを開催し、沢則行氏（チェコ人形アカデミー 人形師）を講師として招聘した。

第3章 調査区について

第1節 調査区の設定

調査区の設定は2017年度までの調査を踏襲し、中谷榮氏の所有地南西隅の基準杭から設定した4m四方のグリッド配置に基づいている。グリッド番号は南北方向をアラビア数字、東西方向はアルファベットで表記し、これらの北西交差点をもって呼称している(第2図参照)。本年度の調査は大グリッドA01、A02、A03、B01、B02、B03、Z02、Z03を対象に実施し、最終的な面積は計31 m²となった。

A03-a1,a3,a4、A03-b3,b4、A03-c1,c2、A03-d2,d3は、2017年度にIX層中まで掘削が進行していた調査区である。本年度は、これらの調査区においてIX層の遺物包含層の下限とその下に位置する包含層の確認を試みた。

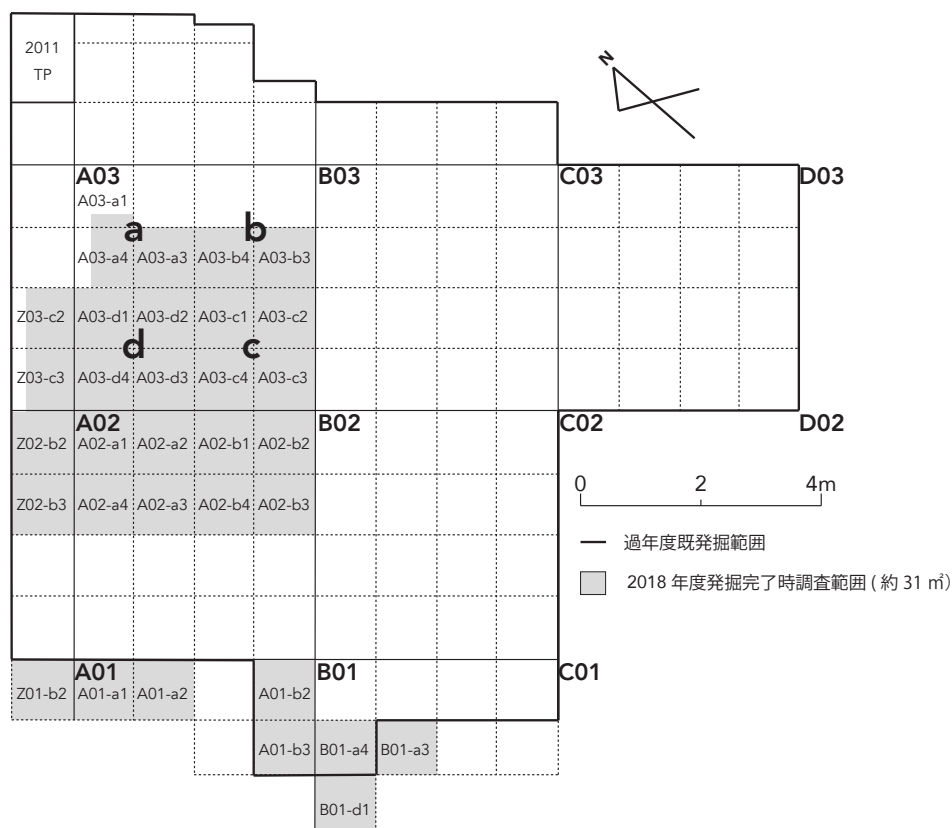
A03-c3,c4、A03-d3、A02-a2,a3、A02-b1～b4は、A02-a3を除く調査区でVIIaからIX層の上面まで掘削を完了した。A02-a3は、作業用動線を確保する目的で掘削が遅れたためVIII層途中で作業を停止した。

A03-d1,d4、Z03-c2,c3は、2017年度に十和田式段階に比定されるNAT004号人骨が副葬品と共に発見された範囲である。これらの調査区については、V層およびVII層から調査を開始したが、VII層に掘り込んだ浅い住居様遺構を確認したため、最終的な発掘停止面は遺構下部(VII層中)にとどまっている。

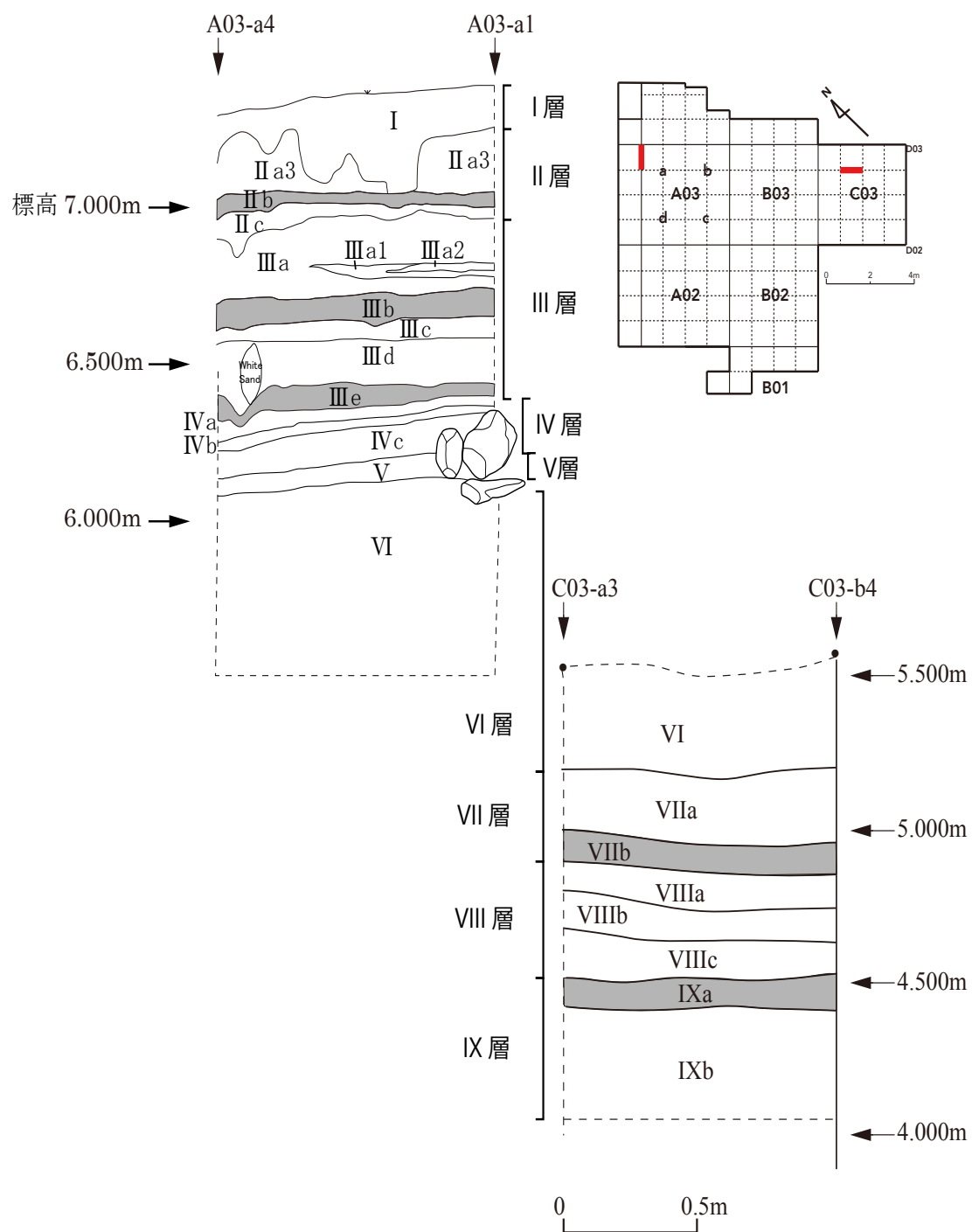
A02-a1,a4、Z02-b2,b3は、西側の壁面を養生する目的で部分的に未発掘の範囲が設定されていた。本年度はこれらの調査区にかかる未発掘範囲をI層から掘り下げ、IIIeまたはIII f層で掘削を停止した。

A01-a1,a2、Z01-b2は、B01区を中心に検出されたアワビ貝集積遺構の分布範囲の確定を目的として、本年度新たに拡張された調査区である。これらの調査区は、I層からIIa層まで掘り下げられた。

アワビ貝集積遺構の堆積状況把握のため、2017年度に調査されたA01-b3、B01-a4に加えて、A01-b2、B01-a3、B01-d1区が新たにI層から掘り下げられた。アワビ貝集積外の発掘停止面は、IdおよびIIa層である。



第2図 遺跡周辺地形と調査区配置図



第3図 遺跡の基本層序

第2節 調査区の層序

本遺跡の堆積層は、自然砂層と人為的な魚骨層や獣骨層、生活面で構成される。これらは互層となり全体で 厚い文化層を形成する。ラミナ状に堆積する魚骨層は発掘範囲の全域に連続して均一に広がるものではなく、部分的に重なりながらも、局所的な広がりを見せて堆積している。調査区全体の基本土層は、上層から

I 層：表土層および攪乱層。下層は一部、近世末期の文化層を含む

II 層：砂層。近世アイヌ文化期の局所的なアワビ貝層、擦文文化期、元地式段階の遺物を含む

III 層：魚骨層および貝層。オホーツク文化期（元地式、沈線文式、刻文式段階）の遺物を含む

IV 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）の包含層

V 層：砂層。オホーツク文化期（十和田式段階）～続縄文文化期の文化層

VI 層：砂層。続縄文文化期の文化層

VII 層：砂層。続縄文文化期の文化層で VI 層よりも遺物や遺構が増える

VIII 層：砂層。続縄文文化期および縄文文化晩期の文化層で獣骨の密集面を含む

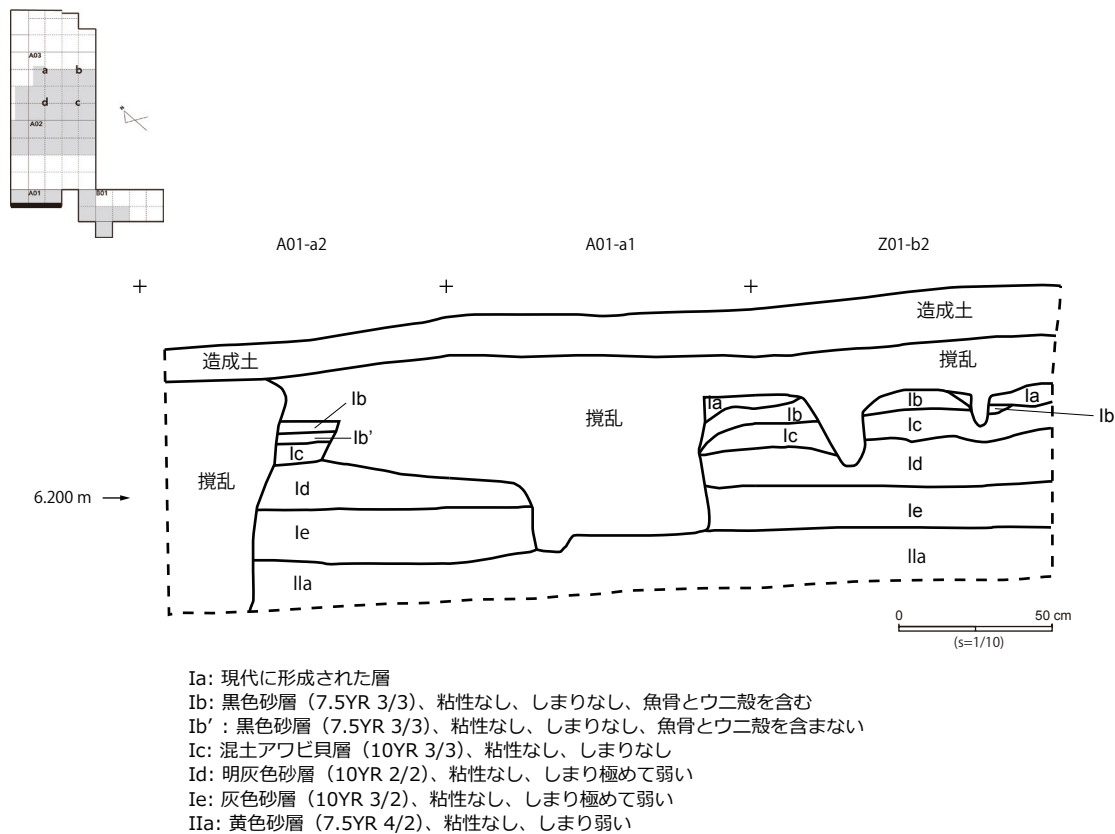
IX 層：砂層。縄文文化晩期中心の文化層で獣骨の密集面を含む

となる（第3図）。

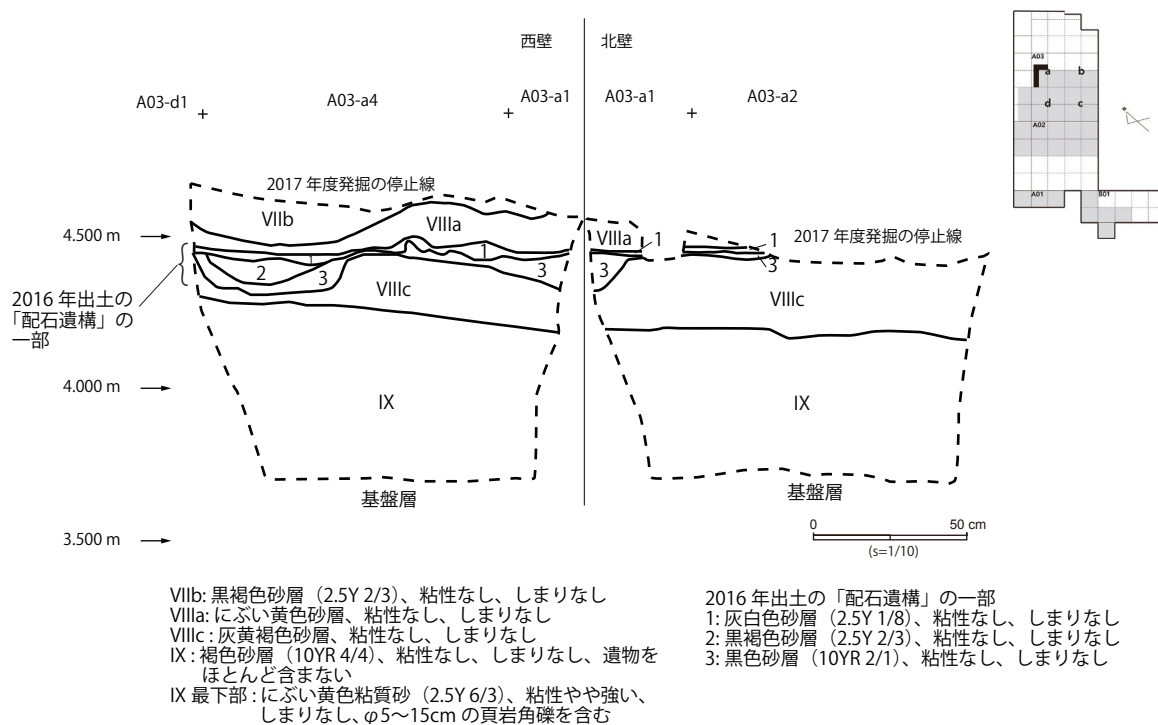
本年度は、調査の進行に合わせ複数のセクション図を作成したが、その一部を第4～5図に示す。

第4図は新規に拡張した A01-a1,a2、Z01-b2 区の南壁を記載したセクション図である。最上層は、現代の造成土でその直下に現代の攪乱層が形成されている。A01-a2 の東から 30cm 程は IIa 層にまで達する深い垂直の攪乱が認められた。Ia から IIa までの層準は概ね過年度の層序と一致している。Ib' とした層は堆積が薄く、従来確認されていた Ib 層との差も魚骨とウニ殻の包含のみであることから局所的に形成されたことが推察される。Ib・Ic 層にはアイヌ文化期の遺物と考えられる鉄製品破片が含まれていた。Id・Ie 層は、遺物の出土が少なく、IIa 層からは擦文土器片が出土した。

第5図は、A03-d1、A03-a4、A03-a1 の西壁と A03-a1、A03-a2 の北壁を記録したセクション図である。VIIb 層より上層の堆積は 2017 年度までに掘削が完了している。VIII 層中の窪みとそこに充填された堆積物は、2016 年度に発掘および報告された「配石遺構」の一部である。IX 層の下部には、粘性が高く、基盤の角礫を多量に含む砂、および粘土と角礫で構成される基盤層が確認された。このことから、浜中2遺跡 Nakatani 地点の砂層が標高約 3.7m から堆積したことが明らかとなった。



第4図 A01-a2～Z01b2 南壁セクション



第5図 A03-a4（西壁）～A03-a2（北壁）セクション

第4章 検出された遺構

第1節 アイヌ文化期・擦文文化期の遺構

1) アワビ貝集積遺構（第6図）

アイヌ文化期に比定されるアワビ貝の集積は、調査区南側において、2016年度に確認された。2017年度の拡張区においても新たな貝集積が2016年度に確認された貝集積よりも層位的に高い位置で確認されたものの、平面的分布範囲の確定には至らなかった。本年度は、アワビ貝集積遺構の上下関係および分布範囲の確定を目的にZ01-b2、A01-a1、A01-a2、A01-b2、B01-a3、B01-d1を拡張した。

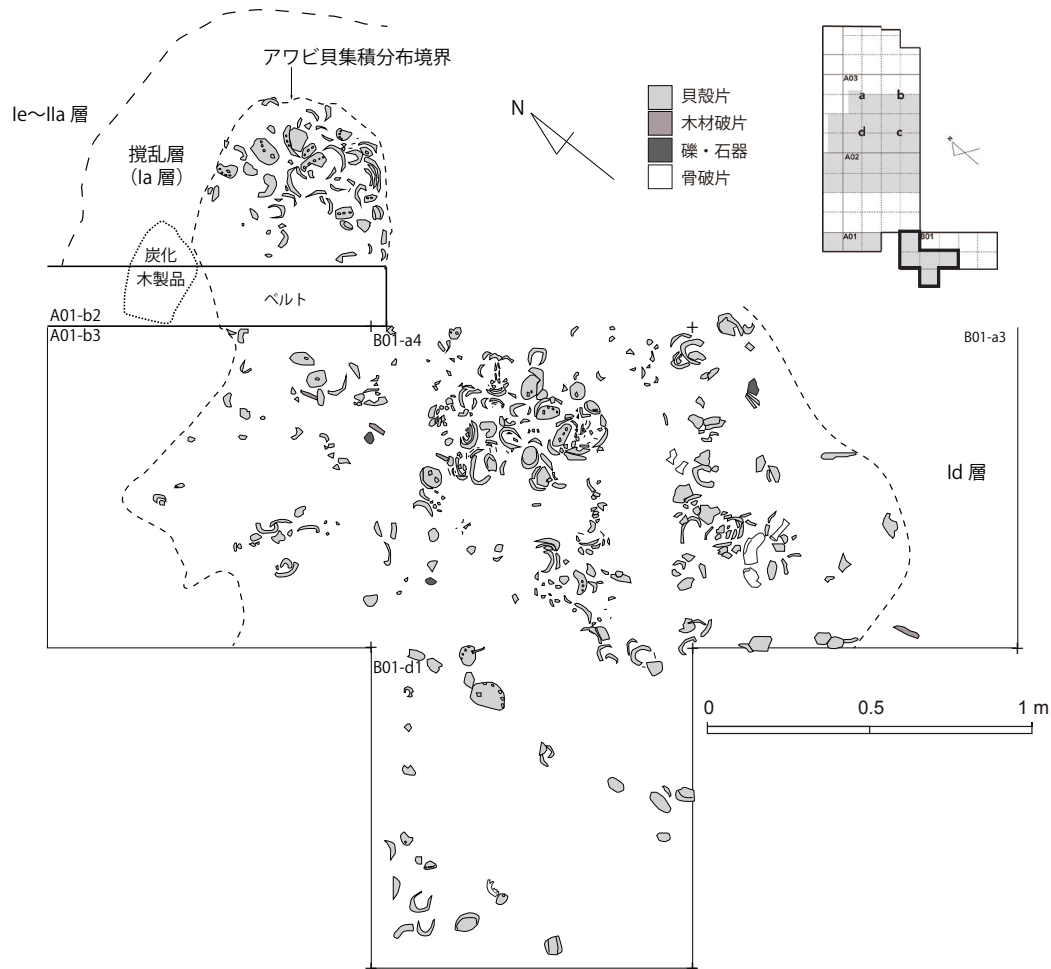
これらの拡張区では、去年度までに先行して掘削したA01-b3およびB01-a4の貝集積検出面とほぼ同一の面に至るまで掘り下げを行った。掘削中の層位確認と記録のためにA01-b2の南に東西方向のベルトを設定している。加えて、A01-b3グリッドの西側には貝の分布が希薄であったことから、貝集積よりも下位の層準を確認するために、西壁から幅15cmの先行掘削トレンチを設定した。

B01-a4を中心に確認されたアワビ貝集積は第6図が示す範囲に分布することがわかる。分布東端はB01-a3の中央付近で、西端はA01-b2とb3の中央付近である。アワビ貝集積の西側の境界は、大規模な攪乱によって破壊されており、本来の貝集積はさらに西側に継続して分布したことが推測される。本年度南側に拡張したB01-d1の範囲内では、貝集積の分布南限が確認できていないため、来年度以降の調査で確認する予定である。

本調査で明らかになったアワビ貝集積遺構は、主にアワビ貝によって構成されるが少量の海獣骨がB01-a3において出土し、イヌ下顎骨が1点、B01-d1から出土している。遺構と攪乱層の境界付近には、炭化した木製品が検出され、それに接する状態で真鍮製キセルの雁首と吸口が出土した。B01-d1では、薄い木片が複数点出土した。また2016・17年度の調査では、折り曲げられたマキリや鉄製品がアワビ貝に伴い出土している。

2) 擦文文化期の土坑群（第7図）

2018年度調査では遺構内堆積中および周辺に擦文土器を伴う小規模な土坑が確認された。確認された土坑は、大きく3つに分けられ、すべてIIa層を掘り込むかたちで構築されている。それぞれ2018 Pit 1～3と呼称することとした（以下Pit 1、2、3と記載する）。Pit 1は、平面形がひょうたん型を呈し、断面では一見二つの土坑が切り合っているようにもみえるが、遺構内は単一の砂層で充填されており、形成過程の前後関係を示す特徴はみられなかった。土坑の底部は二段に分かれており、この土坑はごく短い時間差をもって形成されたと推定できる。Pit 2は、Pit 1の北西に位置する。この土坑の遺構内堆積は、Pit 1のそれとほぼ同様に土器片・炭化物を含む。Pit 3は、構造的にPit 1とほぼ同様に平面ひょうたん型を呈するが、遺構内堆積に明瞭な差があることから、西側の深い土坑が先に形成され、その後東側の浅い土坑が作られたと考えられる。先に堆積した2層は、黒色砂層で炭化物・魚骨・貝殻片などを含み、その上に黒褐色砂



第 6 図 B01-a4 アワビ貝集積

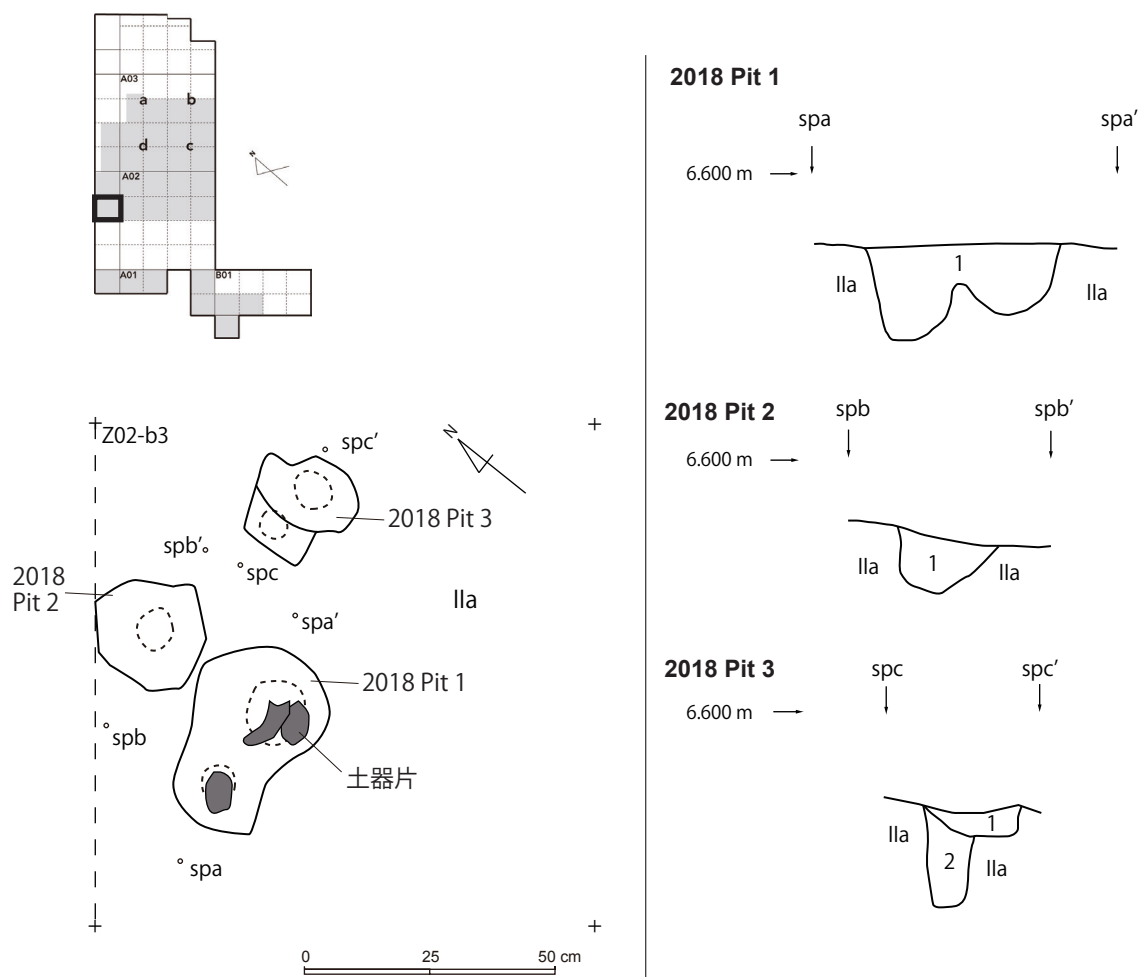
層と IIa 層の黄色砂がまだらに充填している 1 層が存在する。これらの状況から、先行する深い土坑は柱穴とも考えられるが、後者の浅い掘りこみの用途は不明である。

第 2 節 オホーツク文化期の遺構

1) 十和田式段階の小竪穴遺構（第 8 図）

2018 年度調査では、オホーツク文化前期の十和田式段階に比定される V 層中で小竪穴遺構が確認された。小竪穴遺構は、炭化物を豊富に含む VII 層の黒褐色砂層を掘り込んで構築されている。遺構の平面的な広がり、A03-d1・d4 で確認されたがその西側である Z03-c2・c3、南側の A02-a1、Z02-b2 にも分布する可能性がある。しかしこれら西側の調査区は、V 層まで掘削が達しておらず、なおかつ調査区西壁の保護を目的とする土嚢袋が積まれており、本年度は掘削できなかった。南側は、III 層を掘り下げている段階で、こちらも V 層まで掘削が到達していない。また、A03-d2・d3 は、すでに IX 層まで掘り下げられていることから過年度の調査時点で本遺構の一部が検出されていたことになるが、当時はごく小規模の非常に浅い掘りこみと判断され写真記録のみに留め、本遺構の確認には至らなかった。

本遺構の確認によって新たに判明した点は、2017 年度調査で確認された十和田式段階の埋葬



2018 Pit 1

1: 黒色砂層 (10YR 2/1)、粘性なし、しまりややあり、土器片・炭化物・アワビ貝殻片を含む

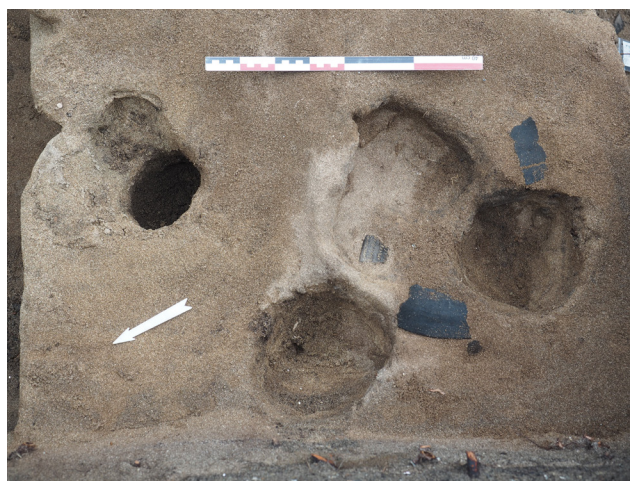
2018 Pit 2

1: 黒色砂層 (10YR 2/1)、粘性なし、しまりややあり、土器片・炭化物・鉄製品破片を含む

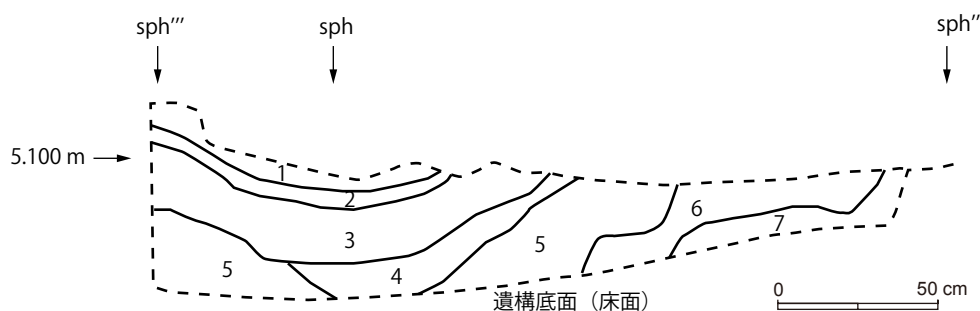
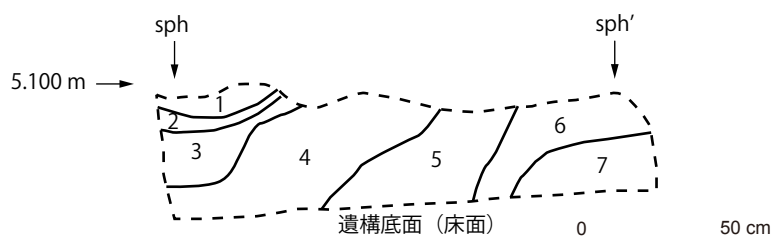
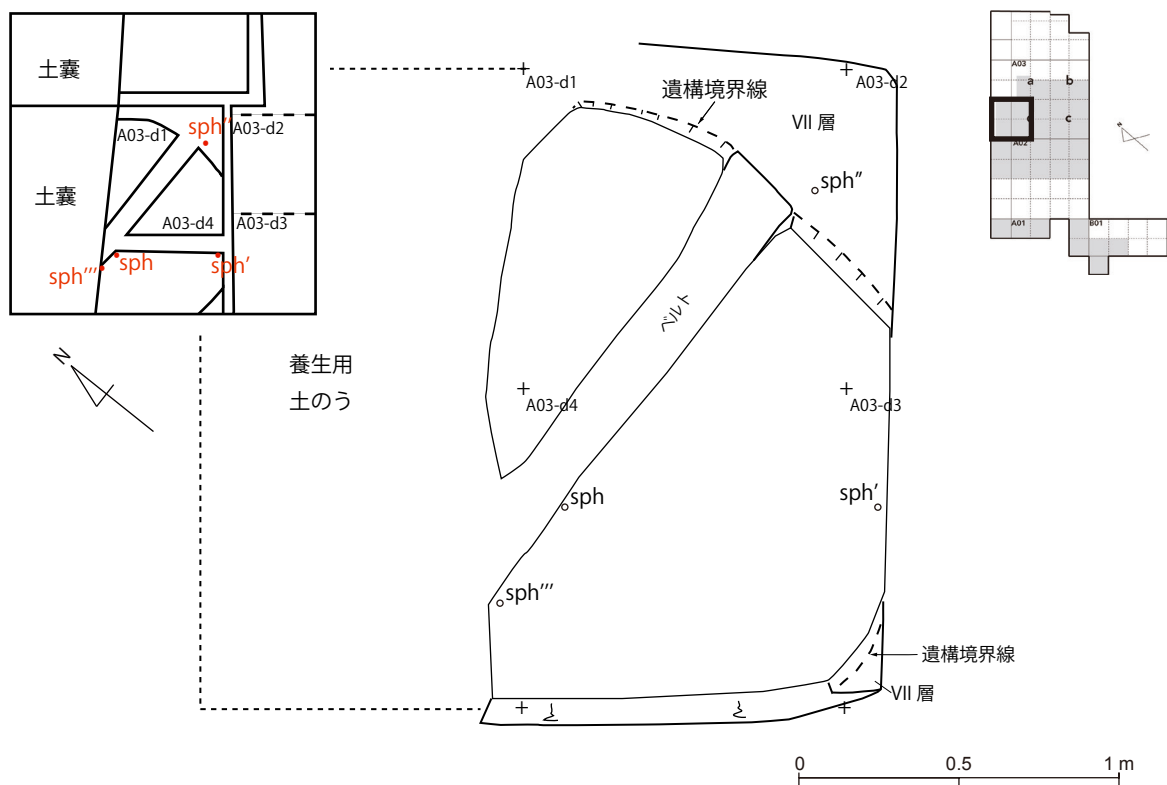
2018 Pit 3

1: 黒褐色および黄色砂層が混在する、粘性なし、しまりなし

2: 黒色砂層 (7.5 YR 1.7/1)、粘性なし、しまりややあり、炭化物・魚骨・貝殻片を含む

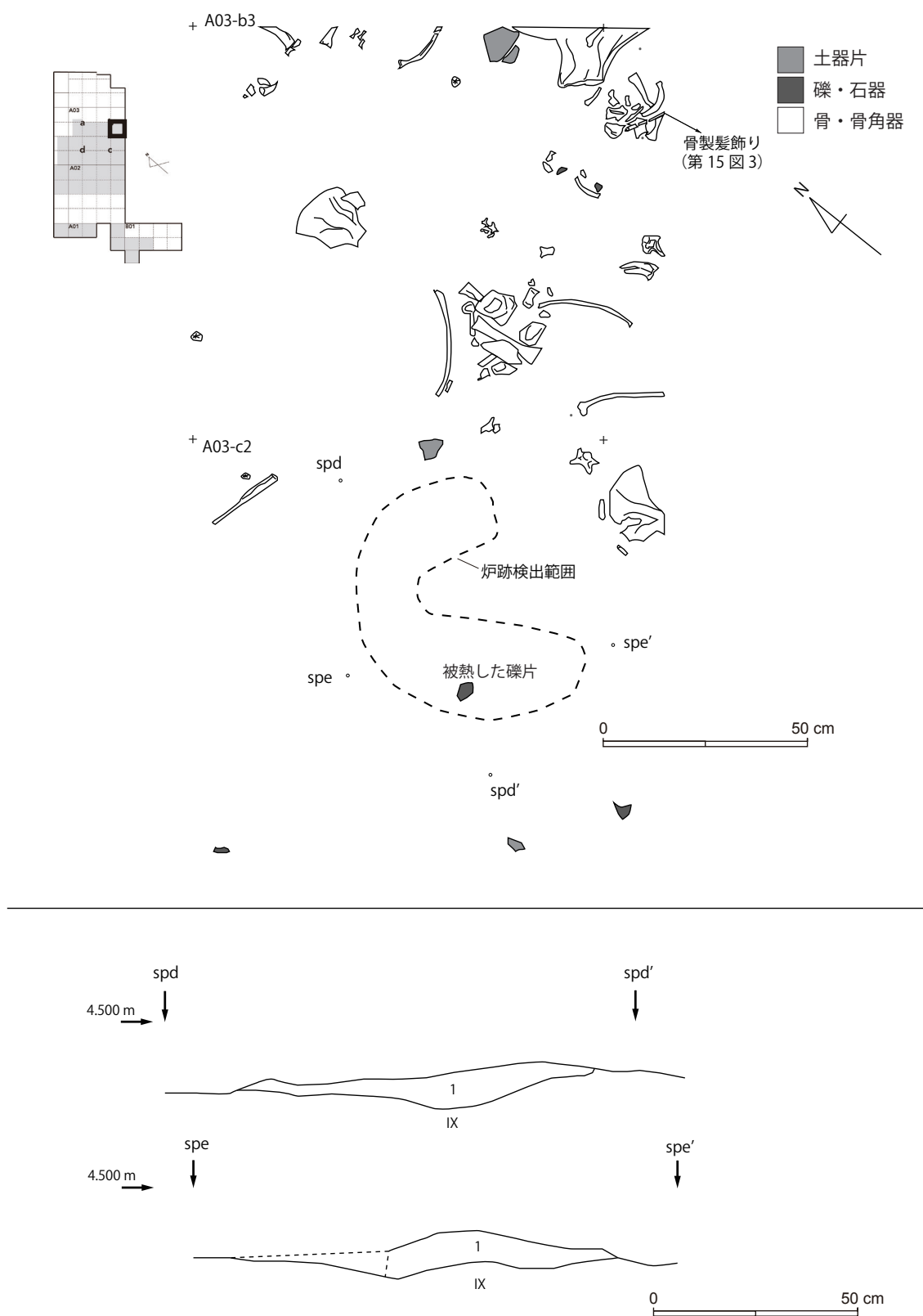


第 7 図 Ila 層の Z02-b3 ピット群出土状況



- 1: 黒褐色砂層、7.4YR 3/2、粘性なし、しまりなし、白色粒子を多く含む
- 2: 暗褐色粘質砂層、10YR 3/3、粘性あり、しまりなし、魚骨・海棲貝類等を多く含む
- 3: 褐色砂層、10YR 4/4、粘性なし、しまりなし、白色粒子を多く含む
- 4: 暗褐色砂層、10YR 4/3、粘性なし、しまりなし
- 5: 黒褐色砂層、10YR 2/2、粘性なし、しまりなし
- 6: 黄褐色砂層、10YR 5/6、粘性なし、しまりなし
- 7: 黒褐色砂層、10YR 2/2、粘性なし、しまりなし

第 8 図 V ～ VII 層中の小竪穴遺構平面・セクション図



1：暗褐色砂層、10YR 2/1、粘性あり、しまりなし、炭化物を多く含み、鳥類骨破片・アワビ貝破片も少数含む

第9図 A03-b3,c2 区の IX 層遺物・炉跡出土状況

遺体である NAT004 号人骨は、本遺構の北壁および北東壁に接する形で、遺構内部に埋葬されていたことが明らかになった。2017 年度の概要報告では、墓壇の掘り込み面および輪郭が明確に捉えられなかったと報告しているが、本小竪穴遺構の確認によって 2017 年度の調査時点で墓壇の明確な輪郭を確認できなかった理由が明らかとなった。

本遺構の掘削にあたって、磁北に対して東西方向のベルトおよびそれに交差する北西―南東方向のベルトをそれぞれ設定し、床面の検出を目指した。遺構覆土の堆積状況はベルト南東および南壁の sph-sph' と sph''-sph'' に示した通りである。(第 8 図)。

第 3 節 縄文文化期の遺構

1) 遺物・鳥獣骨に伴う炉跡 (第 9 図)

A03-a および b では、昨年度から継続して縄文時代晩期の遺物・動物遺存体を多量に包含する IX 層を掘削し、これらの垂直分布境界の把握が試みられた。過年度までにも報告したとおり、VIII 層下部から IX 層には、縄文晩期後葉の浜中大曲式土器が複数出土しており、今年度の調査でも同様の傾向が確認された。一方で、これまでみられなかった炉跡が A03-c2 から検出された。約 50cm 四方の範囲に炭化物を多く含む砂が馬蹄状に広がっており、石囲いなどの付帯施設は認められなかった。本遺構の北側には比較的大型の海獣骨が分布するものの、炉跡内部およびその周囲からにはみられない。炉跡に充填した暗褐色砂層は、層厚が最大 10cm 程度と薄く、鳥類骨やアワビ貝殻破片を擁する。炉跡の平面形態と規模、礫を伴わないなどの諸特徴から、本遺構は短期間に形成されたものと推察される。

第5章 主な出土遺物

第1節 出土遺物の構成

本年度の発掘調査においては、表土である Ia 層から縄文晩期と推定される IX 層まで、各層から多様な遺物が出土した。層ごとの出土総数や詳細な内訳は現在確認中だが、現場でトータルステーションを用いて三次元座標データを記録して取り上げた主な資料は土器片 365 点、石器 1183 点、骨角器類 52 点、動物遺存体 232 点、金属器類 15 点であった。その他の人工・自然遺物を含めると、記録点数は計 1980 点であった。なお骨角器類とは典型的な製品やその破損品だけでなく、加工痕跡やカットマークのある資料を含めた点数である。

第2節 土器

1) 擦文文化期・オホーツク文化期・続縄文文化期

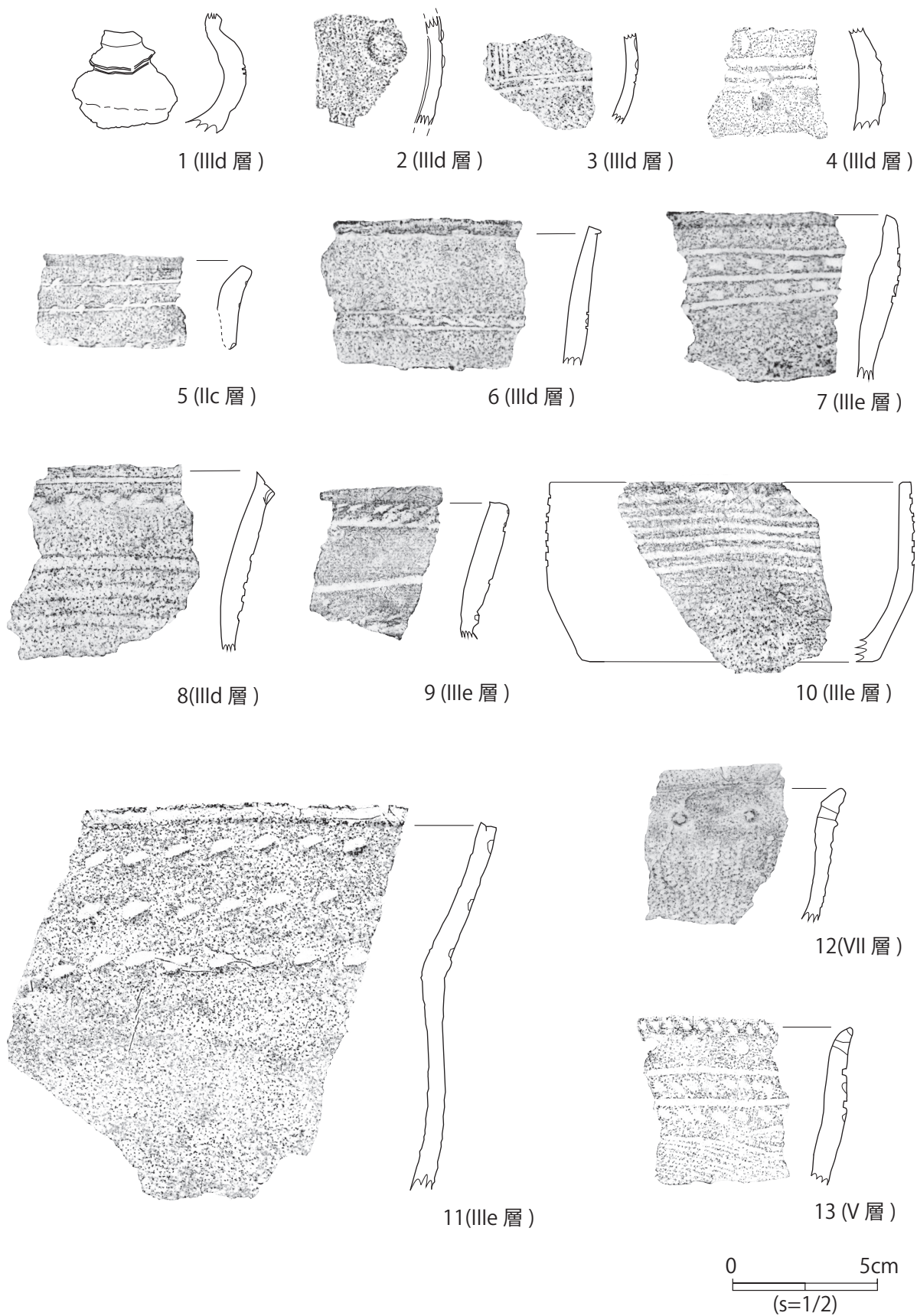
第 10 図には IIc から VII 層までの範囲で出土した土器破片、第 11 図には II および IIIb 層から出土した比較的大型の土器片の図を示した。

第 10 図の 1-11 は、オホーツク文化期の沈線文式および刻文式土器である。1 は、口縁および底部が欠損しているが、その強い湾曲した断面形態からミニチュア土器の破片と考えられる。胴部中央には、二重の沈線が施されている。2 は、胴部破片である。器面には、中央が押圧されその周囲が円形に盛り上がったような文様が観察できる。3 は、4 条の縦走沈線と 2 条の横走沈線が直行する文様を持つ。4 は、上部に刻文と摩擦式浮文が描かれ、その下にボタン状の貼付けがみられる。5 は、外反する頸部に 2 条の沈線、それらに若干重複するように刻文が施されている。6 および 7 は、口唇部が折り返されており、共通して刻文が沈線文に挟まれる形で横走する。8 の口唇部も同様であるが、直下に横走沈線、続いて刻文が施されている。また、資料の下部では摩擦式付文と沈線が交互に施文されている。11 には、等間隔で横走する三列の刻文が施されている。

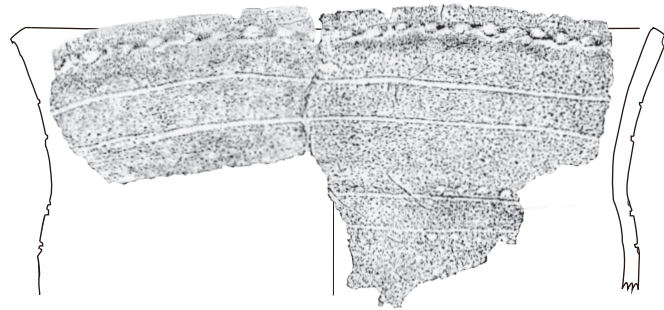
12 は、口唇直下に内側からの刺突（IO）を横走させ胴部には縦走する縄文がみられ、所謂、香深井式に類似する。13 は、若干外側にせり出した口縁の口唇に刻み、その直下に外側からの刺突（OI）が施されている。その下部には、二本の横走する沈線に並行させて斜め下からの刺突による刻目文を配置している。胴部には、斜行する縄線文がみられる。類似した土器は、オンコロマナイ貝塚、声間大曲遺跡、亦稚貝塚においてみられる。礼文島に置いても浜中 2 遺跡以外では幌泊段丘遺跡群からも出土が知られている。

1 はミニチュア土器底部の破片である。2～4 は胴部の破片である。5～9 および 11～13 は口縁部の破片である。10 は鉢である。

第 11 図の 1 は、今年度出土したオホーツク土器のなかで最も大型の接合資料である。口唇は、文様をもたないものの、折り返されており外側へ若干突出している。その直下には刻文が巡って



第 10 図 IIc ～ VII 層出土 土器資料



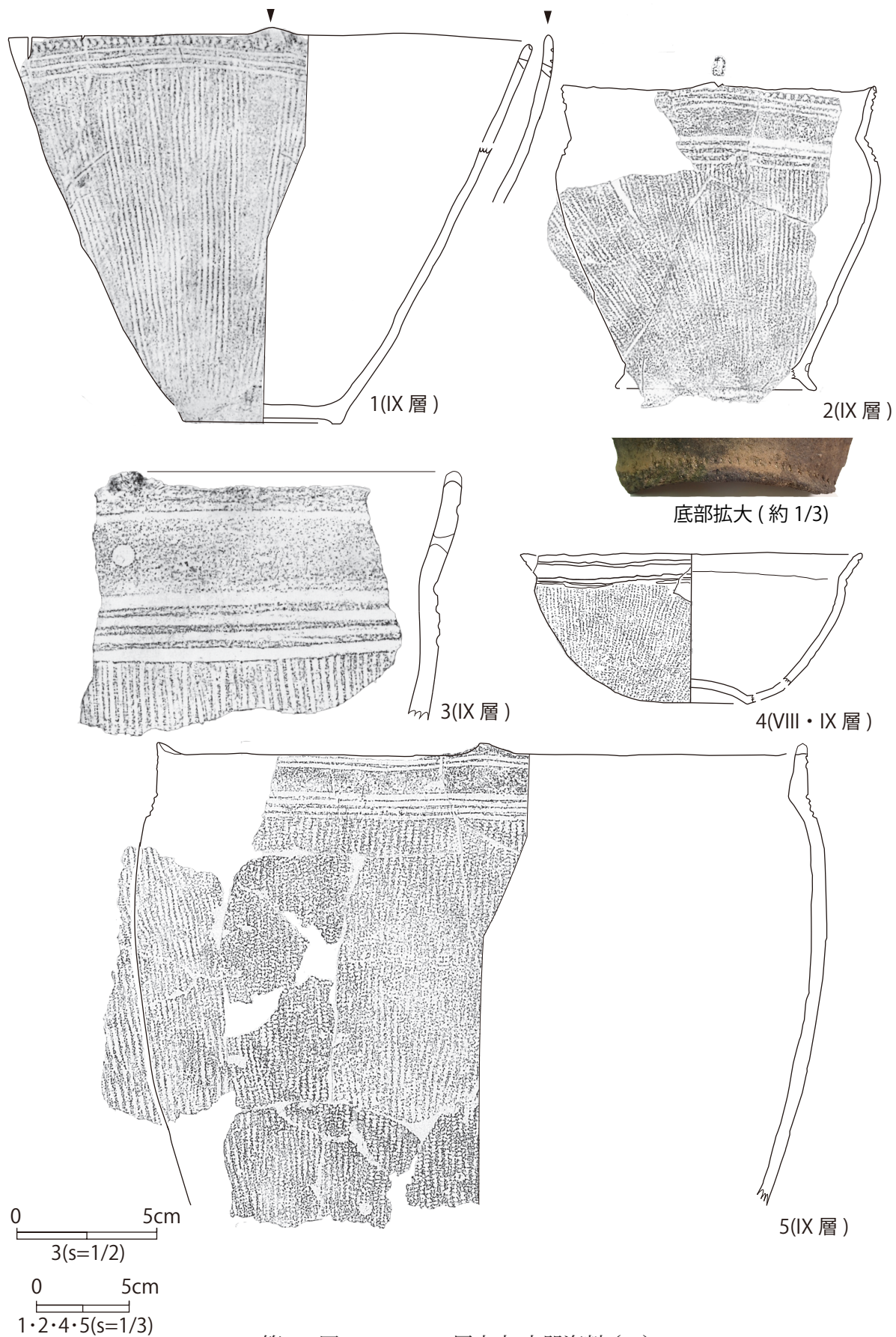
1 (IIIb 層)



2 (IIa 層)

0 5 cm
(s=1/3)

第 11 図 IIa、IIIb 層出土 土器資料



第 12 図 VIII ～ IX 層出土 土器資料 (1)



1a 口縁部



1b 底部



1c 正面

(IX 層)



1d 側面



2a 正面



2b 台部拡大

(VIII・IX 層)

縮尺：
1・2a: 約 1/3、
2b: 約 2/3

第 13 図 VIII ～ IX 層出土 土器資料 (2)

おり、一定の空間を開けて二条の沈線が横走する。胴部にも類似した間隔で二条の沈線が施されている。

2 は、擦文土器の甕である。本資料は、第Ⅱ a 層中に掘りこまれた土坑（2018 pit 1、第 7 図を参照）内部と遺構周辺から出土した。本資料の口縁部は、やや内湾気味に立ち上がっており、頸部がややくびれる。口縁直下に沈線を横走させた後に表面に荒い磨きを施している。頸部には、刻みを三段横走させている。頸部下には、沈線と刻みによる列点で構成される菱形の文様帯が区画され、その下部を複段の横走沈線を走らせている。この横走沈線は、1 本の連続した沈線ではなく、幾度かの不連続な沈線を繋げたものである。

2) 縄文文化期

今年度（2018 年）の調査は、昨年度（2017 年）と同じグリッド・層位（Ⅷ・Ⅸ 層）を掘削しているため、昨年度の出土品と接合するものも多い。Ⅷ・Ⅸ 層出土の縄文晩期後葉の土器は、浜中大曲式（第 12 図 1～5、第 13 図 2）が主体で、幣舞式（第 13 図 1）が少量出土している状況が看取される。これら縄文晩期後葉の土器は、時期的なまとまりが看取される良好な資料である。本稿では、復元可能な半完形品を中心にその一部を紹介する。

浜中大曲式の深鉢には砲弾形（第 12 図 1）と肩部で屈曲するもの（第 12 図 2・3・5）があり、両者ともに口縁部や胴部に横走する沈線文、あるいは刻目列を充填し、装飾することに特徴がある。第 12 図 1 は、口縁部に 3 状の沈線文、口唇部に刻目を施す小波状口縁深鉢である。底部底の端が高台状で、弱い上底を形成する。第 12 図 2 は小形の波状口縁深鉢で、波頂に刺突、口唇部に刻目、胴部と底部の境にツメ状の刻目を施している。第 12 図 3 は深鉢で、口唇部に小形の突起を付け、胴部には条痕調整を施している。第 12 図 5 は、推定 4 単位の大形の波状口縁深鉢で、胴部下に補修孔を施している。第 12 図 4 は、壁が薄手で強い上底の小形平縁浅鉢である。第 13 図 1 は楕円形を呈する浅鉢で、刻目を施した小山状の突起を口縁部に 3 カ所付け波頂を形成する。突起波頂部を含む正面側の口唇部には、竹管状工具によるツメ状の刻目が施されている。口縁部から底部底の際にかけて縄文が施されている。

第 13 図 2 は、波状口縁の台付浅鉢である。4 単位と推定される波頂にはエグりを施し、波頂間に小突起を付けアクセントを加えている。口縁部に 3 条、口縁部内面、及び肩部に 4 条沈線を施している。台部には、「○」状透かしと小「○」状刺突を伴う菱形沈線文を交互に充填している。類似する文様構成や手法は、照岸洞窟出土品（千代 1965: 図 6-28）や大川遺跡出土品（余市町教育委員会 2000: 図 58-83）に看取される。

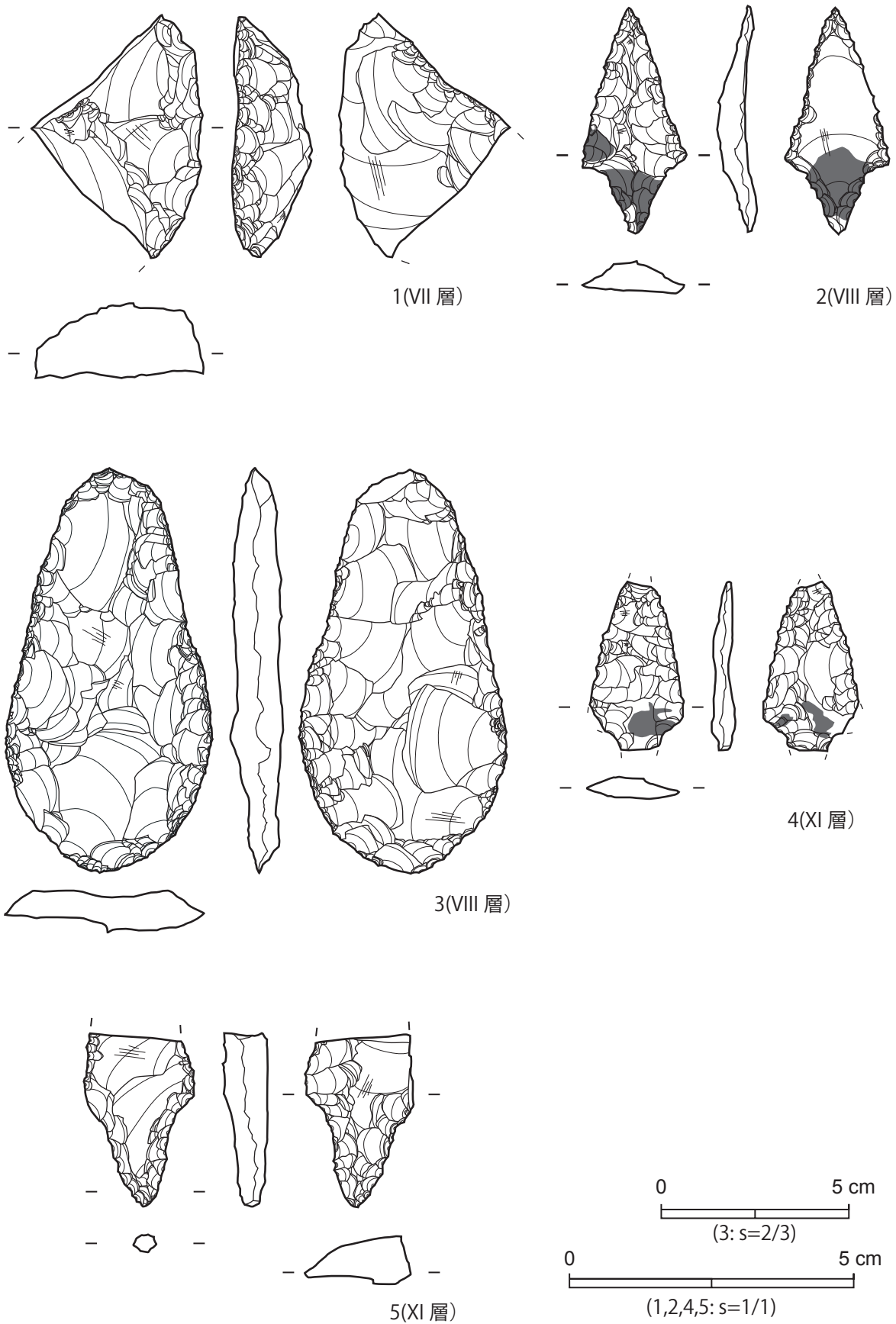
これら縄文晩期後葉の資料は、本遺跡 R 地点Ⅳ層と Y 地点Ⅵ層出土（国立歴史民俗博物館 2000）の浜中大曲式を補完する良好な資料である。本遺跡 Na 地点Ⅷ層には他時期の土器が少量混在しているが、Ⅸ層は浜中大曲式の単純期の層準とみられる。Na 地点出土の縄文晩期後葉の資料は、浜中大曲式の細分と組成、及び東北地方や北海道内の他地域との並行関係を検討する上で重要な資料となるであろう。今後さらに本地点のⅧ・Ⅸ層出土品を詳細に分析することで、これらの課題を検討していく必要がある。

第3節 石器

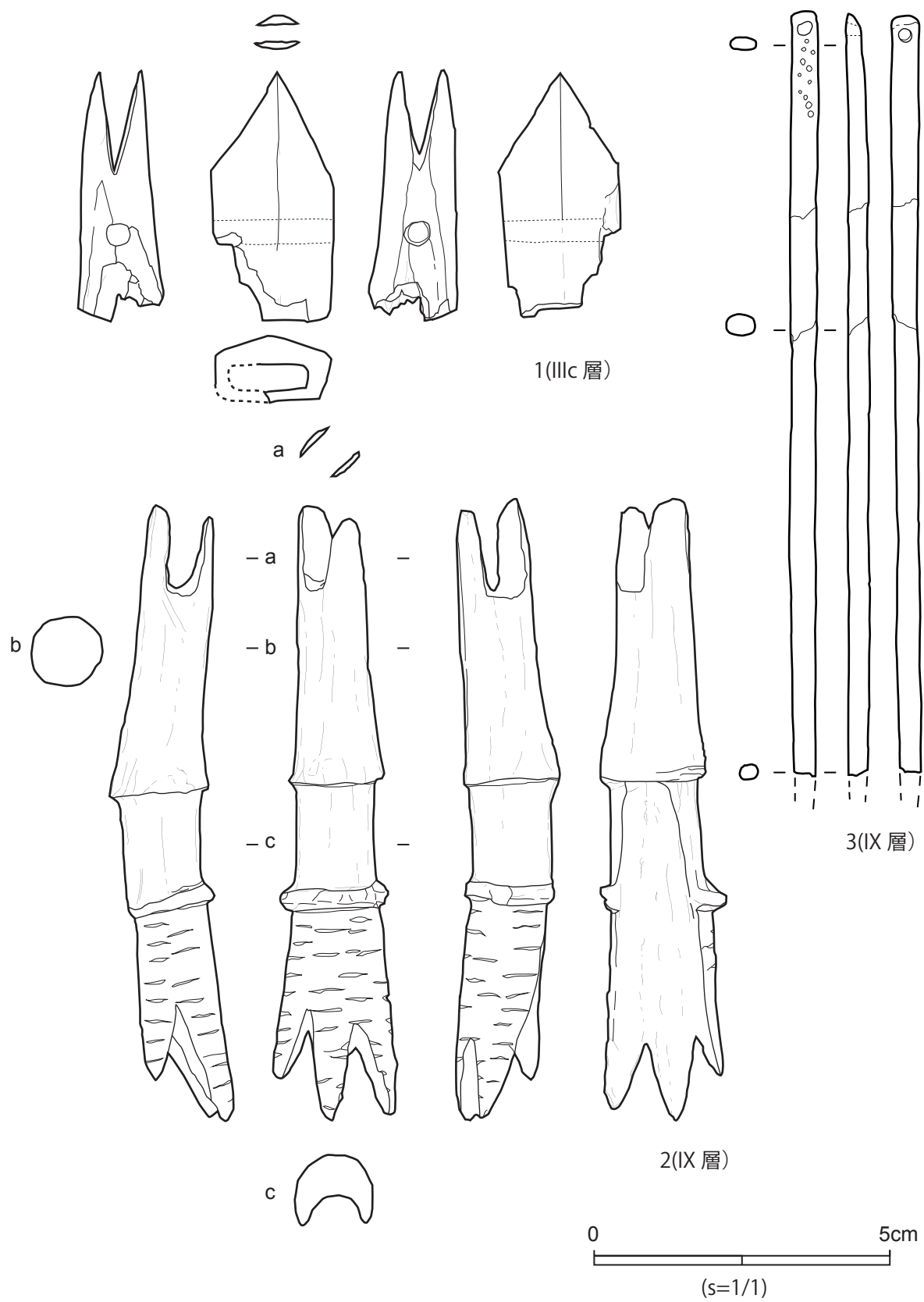
今年度調査で出土した石器のうち、特徴的な石器製品を抽出し第14図に示した。1は、VII層出土の黒曜石製エンドスクレーパーである。素材は比較的厚い剥片を用いており、腹面から背面方向に急角度の二次加工が入念に施されている。腹面側には、上方に位置する折れ面からの打撃がある程度加えられているが、この加工の目的は不明である。刃部は上下共に途中で折損している。2は、VIII層出土の珪質頁岩製有茎石鏃である。本資料には背面左肩付近と茎部、腹面茎部にアスファルトと思われる黒色の付着物が観察できる（濃灰色の箇所）。平面形態は、ほぼ長軸に沿って左右対称であり、整形は背面加工と腹面の周縁部加工によって行われている。加工の度合いが両面で異なるため、側面形態は山なりである。3は、VIII層出土の珪質頁岩製両面加工石器である。本資料は、器体長軸に対して左上から右下にかけて折れており、隣接する小グリッド間で接合した2点で構成される。素材の両面加工調整は、両面共に器体全域におよんではいるものの、それらの剥離自体に斉一性があまりなく、器面に強い凹凸も見受けられる。一方で、周縁部の二次加工は部分的ではあるが入念に施されており、着柄や使用方法などに関係すると推察される。4は、IX層出土の黒曜石製有茎石鏃である。本資料は、第14図2と同様に黒色のアスファルトの付着が折れた茎部の上部両面に認められる。器形は保たれているものの、先端部背面左肩、茎部は折損している。先端部は、刺突による衝撃で失われたと考えられる。アスファルトは、その付着位置から着柄方法との関連が推察される。5は、IX層出土の珪質頁岩製石錐である。器体の上部は折損しているため、全容は不明である。本資料は、石鏃の茎部とも考えられたが、二次加工が両面共に器体中央まで及ばないこと、資料下端の剥離面に摩耗による光沢が肉眼でも観察できたことから、石錐と判断された。

第4節 骨角器

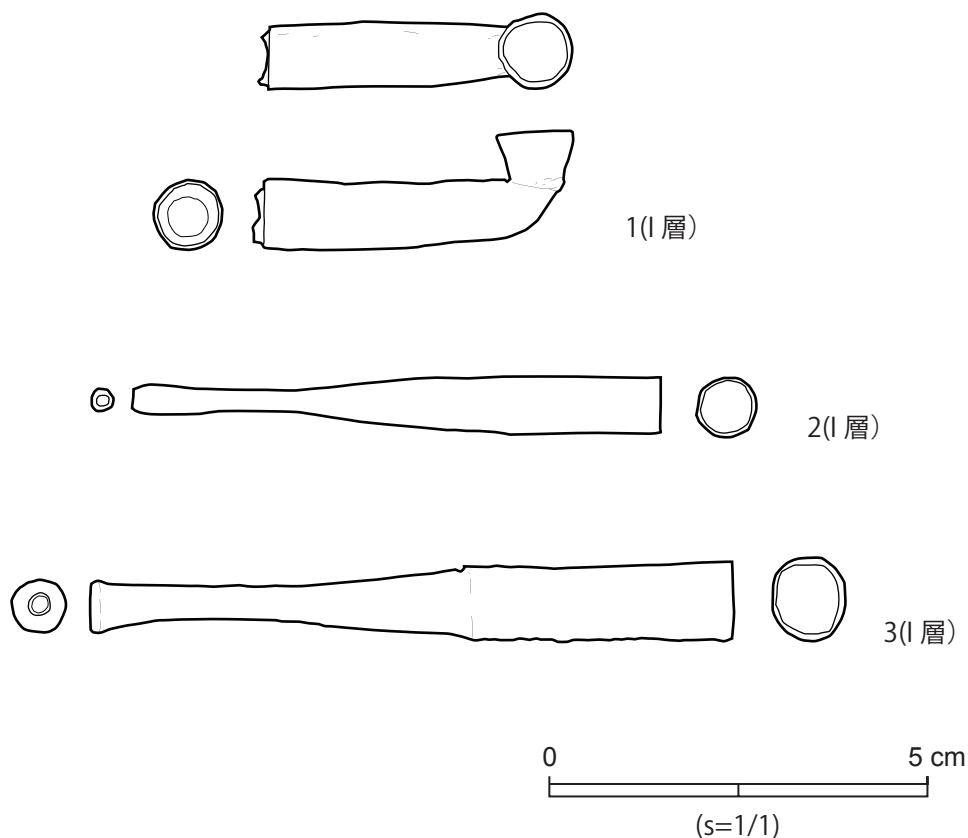
第15図には2018年度に出土した主要な骨角器を図示した。1は、銚頭の先端部である。先端は根バサミ型で、索孔は銚先の着柄方向と平行に設けられている。両面共に長軸中央に稜が観察でき、左右はほぼ対称である。基部側は破損しており形態は不明である。2は、IX層出土の開窩式銚頭である。先端は根バサミ型である。中央部は先端部と基部から明瞭に作り分けられている。中柄の装着される茎槽が、この中央部から基部末端まで設けられていること、そしてこの中央部の上下には段がつけられ、他の部分よりくぼんだ形状をもつことから、緊縛用の索縄を結びつける部位であったと考えられる。基部は三叉に分かれており、全体に横走る刻み文様が施されている。茎槽を下に向けて置いた場合、先端部の根バサミは若干ねじれた状態を示す。3は、IX層出土の骨製品である。先端部は折損しており最大長は不明である。基部には、孔があげられている。扁平な面の片側には、小さい環状の装飾が複数施されている。円筒状の形態、中央部以下が先細っていく形状、基部の孔、若干の装飾といった諸特徴から、本資料は髪飾りのような装身具であった可能性がある。



第 14 図 VII ～ IX 層出土 石器資料



第 15 図 IIIc、IX 層出土骨角器



第 16 図 I 層出土金属器

第 5 節 金属器

第 16 図には、2018 年度に出土した主要な金属器を図示した。1～3 は、全て A01-b2 の攪乱層およびアワビ貝集積に隣接する位置から出土した真鍮製キセルの一部である。1 は、雁首で小口には若干の木質部が残存している。この木質部は、羅宇の一部であると考えられる。火皿から雁首にかけての形態は、古泉（1983）による分類 5 に最も近く、年代は 18 世紀後半に比定される（宇田川 1996）。2 と 3 は、断面直径と最大長に差があるものの近位端から遠位端にかけての基本的なプロポーションは類似している。古泉の分類と比較すると分類 4～6 のいずれかに該当すると考えられるが、雁首に比べこれらの間に大きな形態差はみられない。よって、吸口のみから推定される年代は、18 世紀前半から 19 世紀となる（古泉 1983）。これらの資料は、いずれも中国大陸側で制作されたキセルではなく本州で生産され、島内へ持ち込まれた製品であると推察される（宇田川 1996）。

第 6 章 2017 年度出土 NAT004 号人骨の形態人類学的所見

第 1 節 骨の保存状態

全身の骨格が概ね良好に保存されている。ただし、上位肋骨、下位胸椎、仙骨、左寛骨、右大腿骨、右腓骨、左足の骨の保存状態はやや不良である。

頭骨（第 17 図：(a) - (f)）の保存状態は概ね良好だが、蝶形骨体、鼻腔の外側壁、後鼻孔周辺、右眼窩の内側壁に比較的大きな破損が見られるほか、より軽微な破損が、前頭鱗、左右鼻骨、左上顎骨の前面と後面、後頭鱗の下縁など数箇所に見られる。右頭頂結節付近から左プテリオン付近にかけて頭頂骨に亀裂があり、修復後の頭骨では、左頭頂骨亀裂部とその延長に位置する左蝶鱗状縫合、頬骨側頭縫合において、最大 3 mm のずれが残った。この点を除き、破損に伴う頭蓋の歪みは軽微である。下顎骨はほぼ完形である。歯は生前に脱落した右上顎第 3 大臼歯を除きすべて残存している。なお、右側頭骨の錐体部と左右下顎第 3 大臼歯を同位体分析及び DNA 分析用の試料とした。耳小骨は右のツチ骨・キヌタ骨が残存している。舌骨は欠損している。

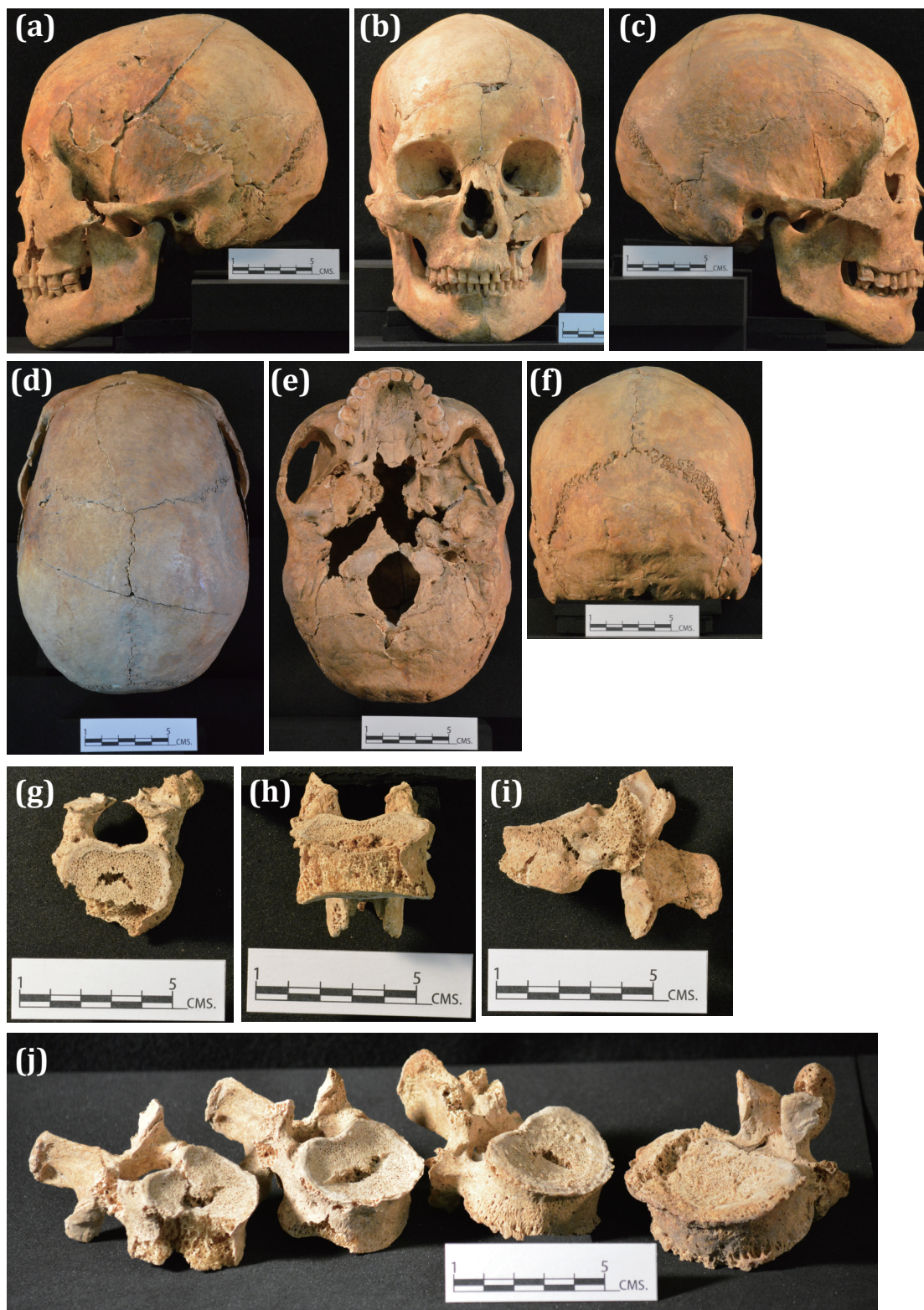
椎骨は環椎から第 1 尾椎まで揃っている。第 9、10、11 胸椎および仙骨は保存不良だが、これら以外の椎骨の破損は軽微である。なお、この個体では、第 11 胸椎と第 12 胸椎の間の椎間関節の形態が腰椎的で、第 11 胸椎が transitional vertebra (Williams et al. 2016) になる（第 17 図：(g) - (j)）。胸骨柄はほぼ完形で、胸骨体は不完全ながら残存している。肋骨は左右 12 対残存している。左右の第 1 肋骨、右の第 7 ～第 11 肋骨、左の第 8 ～第 12 肋骨はほぼ完形で、残りの肋骨はより不完全である。

鎖骨、肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨は概ね保存良好である。左肩甲骨の上角付近と右上腕骨の小結節付近、右尺骨の遠位内側部にやや大きな破損がある。手の骨は右手の末節骨 1 点を欠くが、それ以外すべて揃っており、破損も軽微である。

右寛骨は保存良好だが、坐骨結節と腸骨稜に破損がある。左寛骨はより不完全で、腸骨の数箇所と閉鎖溝付近、恥骨下枝が破損している。右大腿骨は骨頭と骨頸が離断しており、また内側顆が破損している。左大腿骨はほぼ完形である。右膝蓋骨は下部を欠き、左膝蓋骨はほぼ完形である。右脛骨は右側近位端前面、左脛骨は近位端と骨体遠位部が破損している。右腓骨は遠位骨体に欠損があり、近位部と遠位端が離断している。左腓骨はほぼ完形である。右足の骨は中節骨 2 点と末節骨 2 点を欠くが、それ以外すべて揃っており、破損も軽微である。一方、左足の骨は楔状骨 3 点と基節骨 1 点、中節骨 3 点、末節骨 1 点を欠き、残存している骨の大半が保存不良である。

第 2 節 性別と死亡時年齢

性別は、寛骨の形態 (Igarashi 1992, White et al. 2012) に基づいて判定した。恥骨下陥凹と腹側弧が明瞭に観察されたこと、内側から見たときに恥骨下枝の内側縁（下縁）が鋭いこと、恥骨上枝が細長いこと、大坐骨切痕が幅広いこと、さらに左寛骨の耳状面前溝において明瞭な輪郭



第 17 図 NAT004 号人骨

NAT004 号人骨の頭骨 (a-f) および骨折が確認された椎骨 (g-j)。(a) 左側面観 (b) 前面観 (c) 右側面観 (d) 上面観 (e) 底面観 (f) 後面観 (g) 第 11 胸椎 (h) 第 12 胸椎前面 (i) 第 12 胸椎側面 (j) 左から第 1～第 4 腰椎。椎体の骨折が見えるよう、第 1、第 2 腰椎は上面を上、第 3、第 4 腰椎は下面を上に向けている。

を伴うピットが観察されたことから、女性と判定した。

死亡時年齢は複数部位の形態的特徴をもとに総合的に推定した。恥骨結合部については、結合面周縁が骨吸収によって一部崩壊しており、恥骨結合面内の凹凸は不規則で小孔が多数観察されることから、Brooks and Suchey (1990) の Phase 6 (45 歳未満の可能性が低く、60 歳以上の可能性が十分ある) と判定された。腸骨耳状面の形態は、Buckberry and Chamberlain (2002) の基準に照らして Stage 6 (40 歳未満の可能性が低く、65 歳以上の可能性が十分ある) と判定された。一方、脳頭蓋 8 箇所と顔面頭蓋 5 箇所の頭蓋縫合の癒合状況を点数化し、近代日本人を参照群とする Sakaue (2015) の方法を適用したところ、30 代後半から 50 代前半と推定された。左右の膝蓋骨は大腿四頭筋の停止部の骨棘が発達しておらず、Sakaue (2008) の基準を適用すると Score 1 か 2 であり、40 代から 50 代と推定される。また、歯の咬耗は著しいものの、残存歯が 31 本あり、したがって老齢とは考えにくい。これらの所見を総合すると、この個体は熟年(40 代または 50 代) で死亡した可能性が高い。

第 3 節 頭蓋の形態と体格

以下の計測はマルチン式(馬場 1991)による。脳頭蓋最大長は 197 mm、脳頭蓋最大幅は 143 mm、頭蓋長幅示数は 72.6 で、礼文島浜中でこれまでに出土したオホーツク人骨および船泊遺跡で出土した縄文時代人骨(松村・姉崎 2000)のどの個体よりも長頭である。最小前頭幅は 97 mm、頬骨弓幅は 149mm、中顔幅は 108 mm、上顔高は 75 mm であった。ウィルヒョウ上顔示数は 69.4 で、低顔(chamaeprosop)に分類されるが、この値は礼文島のオホーツク人女性の平均に近い。鼻幅は 25 mm、鼻高は 53 mm であった。鼻示数は 47.2 で、辛うじて中鼻(mesorrhin)に分類されるが、縄文人に比べてかなり狭鼻で、礼文島のオホーツク人女性平均に近い。船泊遺跡の縄文人女性と比較すると、中顔部に対して額の幅が狭く、かつ顔が高い点でオホーツク人的である。

四肢骨の長さに関しては、上腕骨最大長は右 304 mm、左 295 mm、橈骨最大長は右 222 mm、左 223 mm で、左右平均の brachial index は 74.3、左の大腿骨最大長は 423 mm(自然位全長は 421 mm)、左の脛骨最大長は 340 mm で、crural index は 80.4 であった。上腕に対して前腕が短く、大腿に対して下腿が短い点においてもオホーツク人的である。

この個体は他の礼文島のオホーツク人女性に比べて大柄である。推定身長に関して、大腿骨自然位全長と脛骨最大長を併用する、北米の北極圏集団に基づく推定式(Auerbach and Ruff 2010 Table 5)を適用すると 156 cm と推定された。日本人女性に基づく推定式(佐宗・埴原 1998 Table 5 主軸法)を適用すると、大腿骨からの推定身長は 158 cm、脛骨からの推定身長は 157 cm であった。

第 4 節 骨考古学的所見

どの部位にも明らかな受傷痕は見当たらなかった。

頭骨においては、両側の下顎窩の前外側部および右下顎頭の外側部に、軽度の顎関節症を示唆

する退行性変化（多孔性の変化）が観察された。上述のとおり、右上顎第3大臼歯は生前に喪失しており、隣接する右上第2大臼歯遠心の歯槽骨も退縮している。また、右上顎第1大臼歯の舌側根を支持していた歯槽骨もおそらく歯周病によって吸収されている。そのほかの部位の歯槽骨の退縮は総じて軽微である。歯の咬耗はかなり進行しており、Smith (1984) の基準に照らすと、下顎第1大臼歯が Stage 7、第2大臼歯が Stage 6 または 7 に相当する。また、大臼歯咬合面の頬舌方向の傾斜が顕著であり、この点において狩猟採集民よりも農耕民の咬耗様式に類似する (Smith 1984)。

第11胸椎から第4腰椎にかけて圧迫骨折が観察されることから骨粗鬆症が示唆される（写真(g)-(j)）。第11胸椎から第2腰椎は椎体上面、第3腰椎は椎体下面が陥凹し、第12胸椎は楔状を呈する。第4腰椎においては、椎体下面の左端6分の1ほどが、骨折による破断後に外側下方に6mmほどずれた状態で癒合している。四肢骨の変形性関節症に関しては、左右の大腿骨膝関節面内に骨過形成と多孔性変化が見られ、軽度の膝関節症が示唆されたほか、右手の第三中手基節関節では中手骨にやや顕著な骨過形成が見られた。

左寛骨では耳状面前溝に明瞭な輪郭を伴うピットが観察されたが、右寛骨の耳状面前溝は浅く、輪郭がやや不明瞭である。Igarashi (1992) の基準に照らすと、左がPまたはPP、右がNまたはPに相当する。また、左右の恥骨において、恥骨結合面に接する背側面のピットが観察された。これは Stewart (1970) の基準における "medium to large" に相当する。ピットの発達には加齢の影響が大きいことを踏まえると (Suchey et al. 1979; Maass and Friedling 2016)、この個体の妊娠出産経験については不明である。

左側は破損により不明であるが、右距骨と右脛骨では蹲踞面が発達していた。距骨蹲踞面は、内果関節面の前方延長と滑車関節上面の内側での前方延長の一体化と、滑車関節上面の外側での前方延長を呈する。ただし、関節面の前方延長は頸部にまでは広がっていない。脛骨蹲踞面に相対する距骨頸上面には粗面が観察された。これらの特徴から、この個体は習慣的に蹲踞姿勢をとっていたことが示唆される。

第7章 まとめ

本年度の調査は、昨年度までの調査を継続してアイヌ文化期に比定されるアワビ貝集積遺構の分布と、縄文晩期相当層の遺物分布状況の確認を主たる目的として行った。アワビ貝集積遺構はそのA01-b2・b3区西側で激しい攪乱を受けていることが明らかとなった。遺構の南側の広がりについては確認できていない。アワビ貝集積遺構の層位的関係と年代的な位置付けについては、様々な時期の資料が共伴しており、形成時期の幅は長い可能性が考慮されることから、来年度の課題としたい。

オホーツク文化期の成果は、昨年確認された十和田式段階の埋葬が小竪穴遺構の内部に位置していたことが確認できたことである。これまでオホーツク文化期初期に屋内墓は確認されていない。今回確認された小竪穴と十和田式段階の埋葬事例との相関関係については、引き続き慎重に検討したいと考えている。本遺構はまだ完掘できていないため、来年度以降に改めて小竪穴の性格の確認を図りたい。

昨年同様、縄文文化期の文化層に関しては、海獣骨や鳥骨と土器や石器が集中し、調査区全体に面的に広がっていることが確認できた。出土した土器も、前年度資料と接合し完形近くまで復元可能な個体が複数含まれていることが明らかとなった。土器型式に基づく、VIII層下部からIX層で確認された生活面は、縄文晩期後葉に位置づけることが可能である。また、2018年度の調査では、IX層以下を掘り下げた結果、現地表から約4mの深さの地点、標高3.7mにおいて頁岩と粘土で構成される基盤を確認することができた。IX層以下には文化遺物は確認できておらず、浜中2遺跡の中谷地点における生活面の形成は、縄文晩期以降に開始されたことが確認できたことになる。

一方で、中谷地点から南東に数百メートル離れた国立歴史民俗博物館や筑波大学の調査地点では、縄文中期段階の生活面や資料が出土しており、これらの先行する調査成果と比較することにより、浜中砂丘には異なる砂丘形成時期と複数の砂列帯の存在を想定する必要がある。

本調査の実施にあっては、地権者である中谷榮氏、浜中自治会長の相原栄氏をはじめとする浜中・船泊両地区の皆様、そして礼文町教育委員会 藤澤隆史氏に多大なご助力とご支援を賜った。末筆ながら改めて感謝申し上げます。

引用・参考文献（日本語文献、英語文献の順で記した）

- 岩波連・長沼正樹 2015「浜中 2 遺跡の遺跡形成過程とその特異性」『一般社団法人日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨』、日本考古学協会、東京、154-155 頁
- 岩波連・平澤悠・岡田真弓・種石悠・長沼正樹・藤澤隆史・蔦谷匠・佐藤丈寛・深瀬均・木村亮介・米田穰・安達登・佐藤孝雄・石田肇・加藤博文 2016「礼文町浜中 2 遺跡における考古学調査 (2011-2016 年度)」北海道考古学会 (編)『2016 年度北海道考古学会遺跡調査報告会資料集』、北海道考古学会、登別、83-92 頁
- 宇田川洋 1996「北方地域の煙管—考古資料から考える—」北海道立北方民族博物館 (編)『第 11 回特別展 たばこと民族文化～たばこが北方に伝わるまで～』、網走、12-16 頁
- 加藤博文 2015「礼文島における海洋適応史の復元 - 国際共同研究を通じた取り組み -」岸上伸啓 (編)『国立民族学博物館調査報告 132 環北太平洋地域の先住民文化』、国立民族学博物館、大阪、125-143 頁
- 加藤博文・岩波連・平澤悠・鈴木建治 2012『2011 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡考古学調査概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌、<http://hdl.handle.net/2115/52658>
- 古泉弘 1983『江戸を掘る』柏書房、東京
- 国立歴史民俗博物館 (編) 2000『浜中 2 遺跡発掘調査報告書』国立歴史民俗博物館研究報告 85 集、佐倉
- 児玉作左衛門・大場利夫 1952 「礼文島船泊砂丘遺跡の発掘に就て」『北方文化研究報告』7、167-270 頁
- 佐宗亜衣子、埴原恒彦 1998「日本人女性の新しい身長推定式」『Anthropological Science (Japanese Series)』106、55-66 頁
- 千葉大学文学部考古学研究室 (編)『北海道礼文町浜中 2 遺跡第 5 次発掘調査概報』千葉大学、千葉
- 千代肇 1965「北海道積丹半島第一次調査報告：古宇郡泊村照岸洞窟調査」『先史学研究』5、1-15 頁
- 馬場悠男 1991「人骨計測法」人類学講座編纂委員会 (編)『人類学講座 別巻 1 人体計測法 第 II 部』、雄山閣出版、東京
- 平澤悠・久保大輔・女部田かなみ・森田航 2017「2017 年度 礼文町浜中 2 遺跡における発掘調査成果報告」『2017 年度 北海道考古学会 遺跡調査報告会 資料集』、北海道考古学会、札幌、49-56 頁
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2016『2015 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌
- 北海道大学アイヌ・先住民研究センター加藤博文研究室 (編) 2018『2017 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書』、北海道大学アイヌ・先住民研究センター、札幌

松野正彦・佐藤忠雄・兼重達男「礼文島神埼ウエンナイポ遺跡調査概要」『考古学雑誌』56(2)、66-82 頁

松村博文, 姉崎智子 2000「礼文町船泊遺跡より出土した縄文時代後期の人骨」北海道礼文町教育委員会（編）『礼文町船泊遺跡発掘調査報告書－平成 10 年度発掘調査の報告－』、315-358 頁

余市町教育委員会（編）2000『大川遺跡』、余市町教育委員会、余市

- Auerbach B. M. and Ruff C. B. (2010) Stature estimation formulae for indigenous North American populations. *American Journal of Physical Anthropology*, 141: 190–207.
- Brooks S. and Suchey J. M. (1990) Skeletal age determination based on the os pubis: a comparison of the Acsádi-Nemeskéri and Suchey-Brooks methods. *Human Evolution*, 5: 227–238.
- Buckberry J. L. and Chamberlain A. T. (2002) Age estimation from the auricular surface of the ilium: a revised method. *American Journal of Physical Anthropology*, 119: 231–239.
- Igarashi Y. (1992) Pregnancy bony imprint on Japanese female pelvis and its relation to pregnancy experience. *Journal of the Anthropological Society of Nippon*, 100: 311–319.
- Maass P. and Friedling, L. J. (2016) Scars of parturition? Influences beyond parity. *International Journal of Osteoarchaeology*, 26: 121–131.
- Sakaue K. (2008) New method for diagnosis of the sex and age-at-death of an adult human skeleton from the patella. *Bulletin of National Museum of Nature and Science Series D*, 34: 43–51.
- Sakaue K. (2015) A Bayesian approach to age estimation from cranial suture closure in Japanese people. *Bulletin of National Museum of Nature and Science Series D*, 41: 1–11.
- Smith B. H. (1984) Patterns of molar wear in hunter-gatherers and agriculturalists. *American Journal of Physical Anthropology*, 63: 39–56.
- Stewart T. D. (1970) Identification of the scars of parturition in the skeletal remains of females. In: Stewart T. D. (ed.) *Personal Identification in Mass Disasters*. National Museum of Natural History Smithsonian Institution, Washington, D. C., pp.127–135.
- Suchey J. M., Wiseley D. V., Green R. F., and Noguchi, T. T. (1979) Analysis of dorsal pitting in the os pubis in an extensive sample of modern American females. 51: 517–540.
- White T. D., Black M. T., and Folkens P. A. (2012) *Human Osteology*, Third edition. Elsevier Academic Press.
- Williams S. A., Middleton E. R., Villamil C. I., and Shattuck M. R. (2016) Vertebral numbers and human evolution. *Yearbook of Physical Anthropology*, 159: S19–S36.

報告書抄録

ふ り が な	にせんじゅうはちねんど ほっかいどうれぶんちょう はまなかにいせき はつかつがいようほうこくしょ						
書 名	2018 年度北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書						
副 書 名	Preliminary Archaeological Field report of Excavation at Hamanaka 2 site, Rebun Island, Hokkaido, JAPAN						
巻 次							
シ リ ー ズ 名							
シリーズ 番号							
編 著 者 名	平澤悠・加藤博文						
編 集 機 関	北海道大学アイヌ・先住民研究センター 先住民考古学研究室						
所 在 地	札幌市北区北 8 条西 6 丁目						
発行年月日	2019（平成 31）年 3 月 31 日 作成						
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積
		市町村	遺跡番号				
はまなかにいせき 浜中 2 遺跡	ほっかいどう れぶんぐん れぶんちょう おおあさふなどまりむら あざほろないほ 北海道 礼文郡 礼文町 大字船泊村 字ホロナイホ	01517	H-08-19	45° 43′ 26″	141° 00′ 96″	20180804 ～ 20180825	31 m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
浜中 2 遺跡	遺物 包含地	アイヌ文化期 （近世） 擦文文化期 オホーツク文化期 （古代） 続縄文文化期 （鉄器時代～古代） 縄文文化期 （新石器時代）	アワビ殻を 特徴とする 混土貝層 十和田式段階 の住居様遺構 石器集中 動物骨・遺物 集中分布	方形の孔を有する アワビ貝殻、 キセル吸口・雁首 土器片（擦文土器、オホ ーツク土器）、石器、 骨角器 土器片、石器 （両面調整石器など） 骨角器類 （骨針など） 動物遺存体、土器、 石器、骨角器 （海獣類、鳥類など含む）		アワビ貝集積の分布 と現代の攪乱範囲を 確認した 十和田式段階の住居様 遺構を検出 VIII 層下部から IX 層で 動物遺存体の著しい密集 を検出した	
要 約	A01、B01 調査区 I 層中で近世アイヌ文化期の送り場と考えられるアワビ貝集積の 分布堆積範囲を確認した。 Z03、A03 調査区西側で V 層から VII 層に掘り込んだ住居様遺構を検出した。 A03 調査区と B03 調査区で縄文文化期の IX 層では、2017 年度に引き続き動物骨と土器片や石器とが 密集した状態が面的に広がる状況を確認した。						

2018 年度

北海道礼文町浜中 2 遺跡発掘概要報告書

発行日 2019 年 3 月 31 日

編集 平澤悠・加藤博文

発行 北海道大学アイヌ・先住民研究センター 先住民考古学研究室

060-0808 札幌市北区北 8 条西 6 丁目

印刷・製本 柏楊印刷株式会社

